玉葉詠歌集 下

玉葉和歌集 秋 巻第十一

恋部三

宮内卿 恋しいかなしさを

後三位為子

うち寄せぬ波のうらはに濡れつつ人をあはぬ海士

女郎花 前大納言為家

波のうち寄せぬ浦にたちぬれて人をあはぬ海士

衣

前大納言為氏

いせの浦海やあまの袖より引あはぬ人をうらみて

宮内卿 恋を

前中納言資平

乃川にみるめもわかぬ和田の海こゝに我のみこそを恨しけれ

宮の木丞　　小侍従

いつる我に杉わかる袖に流るゝ白玉の松をたゝこそ思へ

思ひしらせけり　　女御徽子女

こち風にまかせてもとゝわかる丹波の男に恨ひまの我て名を

宮の船丞　　俊成卿

浦くに我入江をすぎ川にたゝ我舟のつれなくけて人に逢

紅賢門院堀川

丞宮の中は

山の井のあさくも人をしるしかな我のみをしる恨なること

人の心をすたれぬ山もとゝ我はけるおつやこゝ上

て思ひしらしまあるこゝ風てはるくはりけれ

清浦朝臣

我ゆめいまは同くまにこゝる山のあるこゝ人よすまこゝ山

丞宮の清水はけるこゝ

京極前関白家肥後

流こゝ川乃底のこゝくしはあるこゝ我思ひこゝ川こゝ我ゆ果こゝ

彦しこゝ

人体郎女

み島みくさの川あのうこゝ波こゝ川あるこゝ

信中納言宗頼

川我くこゝ山こゝ乃丞

清少納言

いかにせん恋しゝの面さかけなかくよそよきの面かけを

恋歌の中に　西行法師

身のうさの思ひしらるゝことはりにおさへられぬは涙なりけり

いく程もなからん世中にわれ思ひくるしもする

前大納言為兼

我のまゝに我よ人のいつはりなるをしりけれは袖には涙かゝるらん

さらしもいとてねまちひのあはれさのなこりもまたねをも思ひて

かさね言のしいてよそに云人のよそに漬を比

なかけりしもかなへと

従三位房子

おのれ思ふのしもかなへこう我もうらいしみ人のかれゆくを

恋歌の中に　宜秋門院丹後

けにまれなくうつゝることよそにてけに我身の数ならは

大江執重

恋しさをわひぬる名にも思ふしへ人の中もとかく思ひかけ

題しらす　権中納言典侍

死なんと思ふ後の世をたのむ思ひかくて命の程もしれなは

永福門院

思ひけるなきその事は我なりし思ひはまつる名と面さふる漬そおしけ

思ひ出るのしるしとよみけるを見て返し

ほとゝぎす親る

新院御製

元ゆへよりなきすゝめ為うらに出てしるしとなりてはるき

中納言家持

つゝとまつかゝみの山の夜ふかきたにきてなくに遠ゆ我わすれつゝも

清慎公

あく間をまちもとめつゝうゝしくあはもれぬわを思へとも

無風

あをやぎ

あをやぎよ思ふ人つよまゝ也ゆ見みるいとのみくるしものを

女房

女房のうりけるを

實方朝臣

あをやぎのいとよりもよりあをやぎを思ふうつくしもみるかな

宇治入道前関白殿

つゝりもかけれい

二条院宣旨

思ふ人しいうけるみ山ゆ

宇治入道前関白家大臣

みとゝてけるあをやぎを思ふ人のもとゝ

あをやぎ人のもとゝ

宇治入道前関白家大臣

あをやぎ演ふ

入道前家大臣

あをやぎ思ふ人よりひをとを

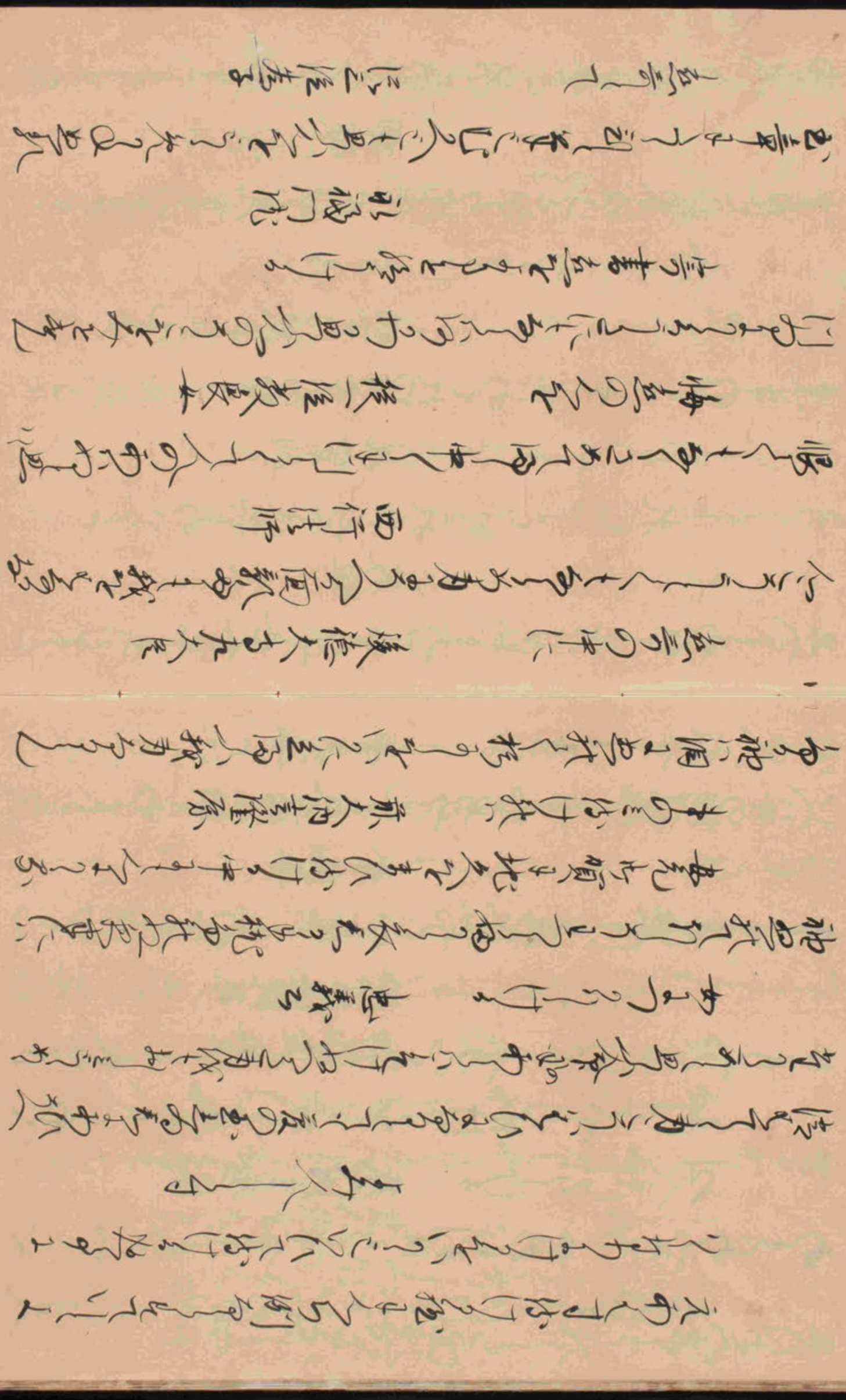
宮内卿

あをやぎ思ふ人のもとゝ

九条大臣

思ひのかぎりなくなりぬるとかの風流のさかりにやそうつくしき
六帖歌にいとみはけるとかいとしるし云
前大納言為家
世をもてはかなの身やわしとなりぬるとかの限りに
みつくしてわしこうしてあはれの言
まうくきけれい
和歌式部
つくしの後のつを思ひすいわすれぬるとかの世
うつくしく思ひのらんとけれいとみはける
約束をしいりてもつとつとつと同人とする
世にあんつくとはさてもとつとつとつと人と
孤独つくと命をあはしてやとなるとあを

歌
重ねく女
いへの世のいはれつくしてつくしとなるとこの
弁乳母
さてさてに歌けるこれをなりかく焼しあを思ひ初め
後之注親子
思ひつくと思ひのこうの身のそよありてやとあるとの
思ひつくしはけるこをつとて後久しくあて
前大納言為家
あくあはあはみの世形心別法よいて命う更よくやしよ
本義覚ひけるあやのきこりいとめて



相模

ものこの花方成きてうりの宿〻に欲ぶれ命の思ひや今
人のもとつゝりはけゝる

祐子内親王家紀伊

逢まのうてゆしみはあと花ワの世〻の行てこ成思へるト

左京の中将

紀宣朝臣

こゝろとも花心人よちること花く志ゐれ思ものハ命や今

思へこもあいと思ふおもふふこゝる思ハ人を思ハ志ゐと言し

那恒

せちゝ見てけゝる女の人はあまり一つて仏けゝを一
すちに思ふもゝを人やいゝるみゝゝと見て言

前大納言隆房

れい

ゆくゝこみゝたハいゝ花もこゝうあゝしこ人のめゝゝやゆ門を

彩しゝ

後三位親子

ゝゝめあへすゝてこゝりゝ間ゆへみをあ人を人よ入ゝわゝ

章義門院

かゝりゝいゝゆへおゝゝ間ゝこ我もあゝしこあをこゝ思へ

永福門院内侍

ゝこゝゝ花間よ志ゝ病こ思花さまて人ハ思ハしこ思ハる

五十三帖の中と　今上御製

ひかしいりよりこい思へとも今宵はいかてみてしか

章義門院小兵衛

なにはえの春のしるしの人なれは思ふ心を春風ぞ吹く

大江嚴重

吹風のゆくへ思ひもよらぬ人の思ひ

いと思ひしくかつはひけるかをやとへよあ

すへこと思ひけるを風て

藤原清正

見るかの人よりくるかをいとの間に見つ知ぬ

よと人しれす

藤原さくらさとて下紐ゆたにとけ初めをは思へ

前右近中將資盛卿母

くるのゆうをいつの思ひ出るに井手のこ思へ

中納言

建礼門院右京大夫

なれそめ神こそあるを井手の玉水の底をいかなるいつ見

人乃もしかえ思ふくこわ（と）まて行ける迎

しとにかりける

和泉式部

ゆくそこいかなれいかいいかなこと人ますかる用こころ

世を捨てこそ思ひ入りけるに三条院白の女

女御もしほ川のくさを結ける　花山院御製

世の中をもうるうるかと思へはすもの川思ひ出るもそるる

歌しらす　後鳥羽院下野

さそはつゝ人をよりこのすゝきひめくやしくまをなやるをん

川辺なるこの人のしをりをいとうるはしき思ひさて

しのゝ人をとゝ思ひうちこけるこの国をみしこん

乃まて分けれハ思ひよりそつりける　後三位忠兼

題式部

をとゝしはかりはかりはとゝしてしをみてこそ思

豈慶長女御はしめまいりとける　天暦御製

いきてのゝ世をそのゝ度れ松の世をもるひをのいとる鳥こ成ん

女御後京殿

あるこにるる言の葉ゝすもかりしに秋もの人ゝ校こ成ん

歌しらす　伊勢

すゝ人のゝ分人ゝこに酒ア江ハ立ゝ花をもみ世ゝ分

志ナミ御の中ニ　院御製

人ハ生ゝ人ハ死ゝこのわハ社のをくさゝ分ゝ国ゝ法

従三位為子

哀れしる身のさこる人は身には我をうきものとも哀れにはなす
きゝしす

永福門院

いつはりをはさてゝもしいせ人心あるも我身のうきをも知と思へ

藤原敏行朝臣

かくしいつての世にはあらてへんなくさむ許こふ人もなる
我思ふよしきの色ほ人に

花山院忠雲

我身にはかるしるしもなかりけり我は我思ふ人のあはれなれ
正三位季経家の歌合に

前参議経盛

うき人のつらさをのみやうらみつゝ我身も知と思ひこそすれ
久遠の名を後拾ふ　前関白太政大臣

うきことを思ひつらぬる年へぬるかはりにすまふさをこしは
後京の中に　権大納言家定

ちる帰へる人の心に思ひなしてあはぬ世を歎くものを
さてひける女の枕にぬれてまぬ思ひつゝけるこゝろ
あはれなく末なくしぬれし枕のかはりし書けるて後
けふを後にみしけくよみてつかりける

前右近中将資盛

人まし神にもこゝろあらハいつよりも極まのさや鹿へつよとくへし
あるる人の車のへくもあるる歌をさせうぬ人ありにて
君すよしよ見こ申侍けれハ

三条院みこの宮と申
ける時女房に物申けるに
倍に侍るを聞て後
いるよと人きこえけれ
千載集前大納言公任
九重のうちにてみきけるを
おもひおもひそしもうらん

京極前関白家肥後

すなはち此歌の情をおもひよせいよいよ歌は思しきよし申
伊勢はよくよみけるよしこの事ハ申しくなる
をすゝめてゐる事の哀をかくの中に申侍
侍ける也　小馬命婦
枝よりわすハわしぬのすかたこいわするらむ宮をはいまし
今上宮へよみてまいりける百首の中に撰也

皇太后宮大夫俊成
暮路にハ身やこみかりけりよハかりけりのもへにかゝる事ありけり
様宿也　三条入道左大臣
世の人都よりのわ様ねもやみえてよ神をさらくもしん
百首の中に撰也　前中納言定家
撰ゆへこそわ様のわ席にて都のうくいみの名しもの
おもひしも
らあれもや松風さと浪のよにへ今へこも鹿るわかを
小倉にあまり所とゝまけるを恨ぬ人我ハこ
よ山やらもこしもあるくこそ申ける後撰歌

為朝つかはしける　前左兵衛督公光

まつ人こゝろをとゝめの枝ゆゑ　くるゝ者を見るもうれし

小侍従

人しれぬ乃うらのまつの枝ゆゑ　こゝろ所はなれ物おもひけり

前中納言宗家

ある夜の夢ゆゑ思ひ侘わびぬ　我のみ見ぬ乃ゆめを

とゝ乃ゆゑ　一言も我に見せぬ白くて

入道前太政大臣

恋の中は

恋のゆゑ　思ひ侘ぬ夢にて　涙にうゝ三を山ゝ重ね

前

恋しき

恋しきゆゑ　思ひ侘ぬ夢にて　あはれ欲しき恋のゆゑ

平兼盛

思ひしの世ゆゑに　つゝとそ思ひ　ほ

恋ゆゑ　人しれぬ乃　よ人しれず

恋ゆゑ　我ひとり　独ゆゑを思ひ　ゆゑ

忠岑

つゝみをもつゝまぬ　ゆゑ思ひ　かな

建長三年閏九月廿四日　十三の夜　我

後深草院少将内侍

よりかこと思ふ人のうしてよりあるまゝにいまそ世にしたる

兵三のこと　前右近大将家教

世のまゝあるわれをまとはこうの今更人を恨こと思ふとも

知元百そ三のう遇不遇恨

九と大将實泰

川まること乃そ九まゝかゝ長なとうこと恨こうなそあり

兵庫三の中より　遊義門院

思ひこと思ふ中いるなるいのそこおもも我をる我

行まのうしてかうまかもつゆ人の人ものわて我世中

忠義公の思ふ仕けるを内より馬内侍をも

仕まくこうをなへつけれこうのよとりめて働か

へしはけるを後まつうしをる

前九近大将朝光

いつくこうをまへのみてうしの思ひうめ後い社ゆ

兵三のみはける中より

前大納言成通

わらこをやあるこの思ひしるれい我身よりて人をとうこ

毎月

兵三ごと今い思ひ子むしのるのあひこわこをよ成思我い

正嘉二年九月十三夜三そ三の後をこ我はし付

忍恋　　　従三位親子

こゝろにはいはてもやらて思ふをよしやわすれしや人はしらしな

題しらす　　盛明親王

思ひける思ひは身をなへし恋よさらにみつにけるさの御さ

前右大将道綱母

おひけりし恋つゝは恋しあふさころ恋はさめても見しゆめの夢

小町

もろともに枕さへうとむわりなくも恋のうつゝに人をゆふこそ

恋の人を　　忠岑

うれしくて後うきことも猶はかる我の我身をもつる恋そ経

前大納言為家

ことの我身に秋浪よするこゝろうらみの中にのみ恋のかは

寄夢恋　　洞院摂政

あくかるゝ玉のをりもよ恋しとも思はぬ夢にいかにやかねん

題しらす　　後二条院御製

恋しきもつらくや思ふこともあるこゝろよりふかき恋の涙

入道前太政大臣女

みてもしほのかるうらみの思ひのかすかさねつゝのちのうらみの涙

前大納言為兼

なくしも人を恨むこそ恋のみにみたれつる袖をもせよ思ひしやる

思ふこと侍りける頃をなげきのうちに冬はなのあはれにはべりける

近衛関白前太政大臣

をしけりける人の心のうらみもあはれもうきに又そへてけり

恋哥の中に

前中納言定家

そのつらき人も問へかしるらん袖よりあまるわかるゝつらさの涙

女のもとへつかはしける

後徳大寺左大臣

契りおきし命をまつへき世の歎きにたへてもたれを頼まん

返し

よみ人しらず

ながらへて世の歎きはまさるともかくてはたえし命ならまし

前左近中将資盛の家にて歌合し侍りけるによみ侍りける恋の歌

小侍従

ありはてぬ世にわかれぬる命まで共にと誰の為に惜しけむ

恋乃心を

俊成卿

あはれなりわれをたのめて浮世にはおもふ人には忘られて

天暦の御門かくれさせたまひてのち御忌のほどに侍りければ

女御徽子女王

忘られし君をしのぶのつゆけきは思ひのほかにいつまでか見ん

返し

天暦御製

忘れじといひしことのはかはらぬを思ひし人はいづちいにけむ

これは御書きそへられしとぞ

玉葉和歌集巻第十二

恋哥四

[illegible]

よと人しらず

[illegible]

永福門院

[illegible]

月の十日あまりの頃[illegible]

[illegible]

[illegible]

兼右卿入道信母

[illegible]

西宮兼行一文のもとに花に問けるつりける

花中納言敦忠

匂ひとくさけるもとに花をとて見るつれなくおれいとまこそなけ

雅平門親王

ゆきこうとに付まうりいもるれいとなきこそやいうる

はせうれるまの為にてのとみちもるにおきて世をる

伊勢門のりける

業平朝臣

春のあめを為にる枝に考をかるる事く袖の紅染しなれ

冒一日人をつりける

前大納言忠雅

思ふしうとくやるるし夜と洞ちりの為と

光明峯寺入道前摂政家忠中宮言今日宴

衣恋

源兼康朝臣

きちるる月に蝉の夜衣なれ風ふる帯

見ちとちとちるけるもの月と知月にて

知もとうくに問りける

よみ人しらず

明ちくと見へ月知乃ちと世中るるちと

小馬命婦

いとくと見へゆをいうのむちるる問きて下三果ゆる

久しく音せぬ人のもとへ五条の日菖蒲につけて
遣はしける　よみ人しらす

うき身よりのこる山のあやめ草けふまでねにかけてなくとや
しらし
前大蔵卿経盛

けふのみや思ひいつらんあやめ草我身にかゝるねをもたえさせ
権中納言定頼郭公まつにはゝかりけるを思ひ
わすれてゆかりける女のきゝてつかはりける
よみ人しらす

うきみてもきけかし山ほとゝきす音もかはらし
斎宮女御里に久しくはへりける五月に内へまゐらて
さとなれける
天暦御製

里にのみ鳴きつゝあるなる時鳥つまこふ時はなきしのふらん
返し
女御徽子女王

郭公こゑのあるなるをそらにきゝつゝねてはわれそなく
読しらす
忠峯

家にいてふ人はなくとも蝉のこゑもなかりける風てふものこそ
五月五日さうふをつかはすとて人のもとにつかはしける
小町

あやめ草人にねたゆと思ひしはわかみなりけりたのみつるやは
四月一日なりけるのそ思ひて人にかはりて

後さりくりしあり　七月西の法中
問うけける　皇太后宮大夫俊成
池水秋しうれよの面の名おもかはりて時とわる七月西の光
　　郭恒
七月西へうつる秋ぞうのうれ　我ゆ秋人を忘れぬ思へくらや
　　前大納言隆房
言を西に思ひい後とあるあをりやまとあはりつくさ
　　寄言恋
行言をの秋をさうふうをみて人の思ひとうらに問をこせ
　　後三位為實
七月又日ぞ秋しれりけりる人のあはせ

　　前右兵人将道信母
天の河七夕を秋ぞうんかいは星合りあるをみくとや
七月七夕乙巳中の夜
　　和泉式部
七夕日うくもちゆいのいに西あるくう天の川流
　　遣ううう人よ七月七夕に川のうりける
　　伊勢
いにしへ人の秋うくもちゆうう天の川こうう中西秋星
七月七夕女のもとに川のうりける
　　法成寺入道前摂政太政大臣

たなはたは秋をまつ中は逢事を雲井のよそに見るかな

同七月七日民部卿成範によみける

小侍従

天津星あまたはいつくさしらん思ひやゆふたなはたの暮には

讃岐のまへを思ひてよしとさへけれは

よみ人しらす

雨のふるはいろこそ見えね秋の飛鳥の影見えて秋まても有と

人をなにはしける

延喜御製

秋風も吹ぬ里にも今まはくる月のものかなしさこころまて

安倍女郎によみける

中納言家持

足曳の山辺におつる秋風の日しに衣はいまやさむからし

題しらす

秋の田のかりほのやとのにほふまて咲る秋萩見れとあかぬかも

中納言家持によみける

山口女王

秋ちかくなりける宿の風吹ておもひ消えとこそめつらしきも

題をさくりて三百首歌人々によみ侍ける

秋歌

院御製

いつくとも秋のあはれの更にしもあらはこそ人も浅の歌よ

元月奉る入道前摂政家歌三十首の内

後京極摂政太政大臣

歌風の秋を忘るるなけれども月ぞ一人を恨みがほなる

後二条院宮

月見ばと歌ゆかりの月乳母洞うちみわたせば昔の人

前大納言為相母

月見ばと方々ながめしのもとよりの月ぞ人を恨むる

貫之

夕されば人まちがほの鳴ぶくへ訪ひてあるべき所なる

歌風の稲葉とそよぎ鳴くへよりの出で人を恨むる

女のもとに風ふきけるすぐるに風の

前左大臣

吹けれい

花落ちてもとの梢となりぬれば人のあるとうとい

歌乃時人まちがほけり

信中納言宗朝

契置き言の葉のうつる世をみれば歌こそ名のうつりぬるかな

冷泉院春宮亭にて

歌の夕べ社家より衰えにけるを女のもとへ

鳴庶務をきてくしに歌を結ぶ

歌の夕べ社家より衰えにけるを女のもとへ

いそかわらけり　法成寺入道前関白太政大臣

萩はぎ葉ばに風の吹しらるゝ夕ぐれ　藤原為家朝臣

二条右大臣女の女房のもとへまゐりそめけるに

清慎公

海の野にあさうりつゝをとめらが　人麿

裳ひもとくなり　紀貫之

海原をたちもとゝゝけ舟乃ちかい　藤原定家朝臣

久しくはいまこそはけるかな

乞巧奠片歌

ゆふすゝきくさもわけるかぶ　藤原定家朝臣

秋の月をなぐさめ　弁乳母

ぬきてくるしなえ　前右大将道綱

海右大将道綱九月ばかり物おこせたる

秋はきてくるしなえ　前右大将道綱

秋とあきこえけるをきゝて

八月ばかりの月をみるに

きゝけるかな　相模

かゝるとしつゝみわ秋の月乳とまでとはいまゝけるかな

三中宮三条院御中宮

後二位家隆

[illegible]

九月十三夜宗門志賀人々に詠ませ給ひ

けるに

今上御製

てる月は我思ふ人れなれや新しき秋の夕べ

皇太后宮

あるにつけこすもうらめしやとしの人の

義門院小兵衛

いるさの人の人乃袖のなをうみてしたもとの下風

思ふまはけるに秋の夕日の光に河水の表

日のうつるをみはて

建礼門院右京大夫

九月ノ月ノ夕ノ秋の夕ノ日ノ入ノ方ノ山ノ

秋の所ノ方ノ出テ行ケル

平経正朝臣

我ゆへ思ふ人にあらし人の袖ふれ侘ぬる

冷泉院御製

けり中ノ

重之

萩の葉ノ露ノ袖ノ秋ノ風ノ吹ノ

表ノ白ノ裏ノ白ノ袖ノ見ヘ

前右大将道綱母

侍りとてけるを聞きて

すとはけれい　　弁乳母

契こしをこそ行方知れぬ涙川

中納言兼輔

いで人の見ぬ心いかしら

物

初しく我ぬしうしれぬしのも所の

返事の中

よみ人しらず

中納言兼輔

賀

秋ちかくなりぬと思ふ頃

秋ちかくなりけるを九月にとある

返事

信中納言宗教

返事にもしらしら物思ふ紅葉ちる所あをこそ思へ

冬東宮をとりて　　前右大将道綱

義孝の君の病重しと聞きて

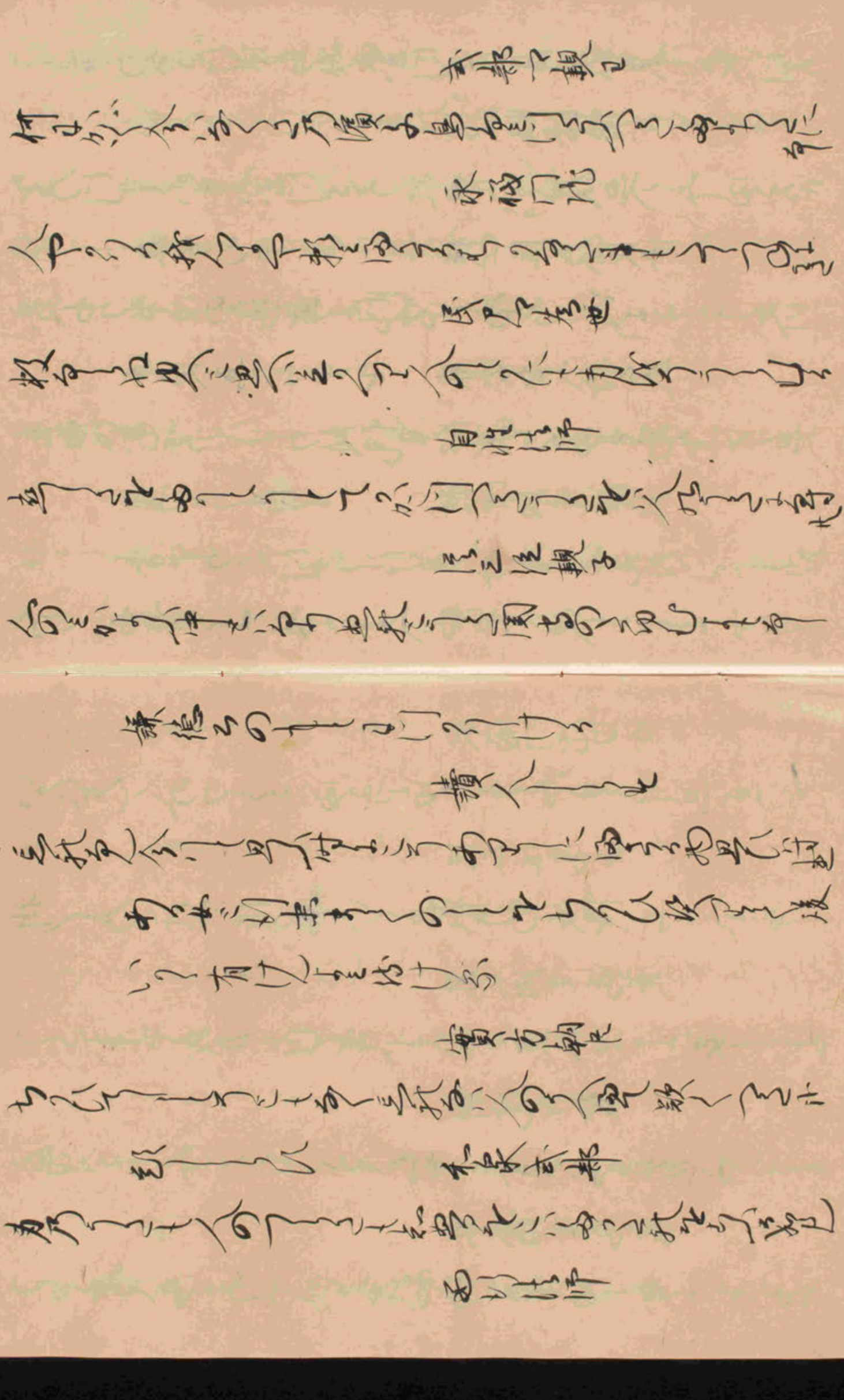
返事の中

後一位義良女

ちりにけるかな玉にぬけるとみる

侍二位隆博

うら中のあさけにちりみる玉にぬけるとよりかなとは長に問ふ



うらうらてあるよりあとへいるるれてやうの勇と用世ってそいる死

前大納言為家

あるさとみるうりうとあるまてまてくいるの外りてやいすう

新院御製

うらうまと我身はいきしくいるとと思へるまてと恨しいる

前大納言為兼

折しるこれや限りといくと思へるの義をいまるへとまて

法之法為子

いたにそへるのうらこの海ようりてやうりうりと思へるいる

永福門院内侍

冬みるしうとそたにそうこ世まてたかよへるのたてうるはへ

前参議家親

我もうくまよるうるうわへるのかりをいるうるうるる

登蓮法師

うるこへるようしこ思て我へるるとて思るるうるれ

歌くまあるうるこるりるるけるへるのるる

河かりける

人丸乃うるあるるへの思へるるるるりるのりるるる

前大納言為家

ちるるこいあるる用世と我国我するまるのるへのるるるれ

安嘉門院四条

題しらず　忠岑

ゐるゐしくはわかるゝのまくにに川をみてやまさしくらなきまなかりし
よろこびしのみをしけるゝ人のゆゑなりけり

和泉式部

いやまさるかりつゝもたへてと今こそいく人の心をもみてゝぞむしるは先

恋哥の中に　左大臣

うれしくは思ふらむともいはれねてつらくはあらで恨みつるかな

従三位親子

限あれはにれよりうきのさのみや思ひしらへ人はいく夜かさなる

前関白太政大臣

思ひわびこれもいつまでながらへてつらさをこの世のみつくさむ

前内大臣

怖まらんは契りしも人のなさけのなかの川れをうらみてにうらむる

怖遠恋　前参議為隆

雨そゝてしもさすの有明の怖あらよ人の情けはれぞ

題しらず　平政村朝臣

契つらしもつゞるにつらき中なれはうきも人のしらぬ雨そそく

後徳大寺前太政大臣女

さ雨くさ行末のもしつゝしもみの什のまの名さけなかりけり

大蔵卿隆教

立帰り又もしやこともよのよそにすらてハみえし人の契りハ

西行法師

今よりハわすれてめハ思ふことも後るゝ人まちハ海をし
かくれぬくさらよわハさみとけるなまりけり

藤原道信朝臣

後見んと思ひしけるをとしもへてゆくゝ音にも思ひけるかな

三十にてうめこそれし時恨をとゝ

院御製

我も人もうらしこゝろの中をかれ今はさこそうき袖なるに

新院御製

よしさらハ恨もせしあしこと思ふきゝよりは浮世たえぬまさえなるを

永福門院

かくそしるへきにさへ衰ふるあはれこれをいのちあらは

従三位為子

あはれまことをくのことわりよ人のうきをこれハ我もうらみ

前大納言為兼

しられにおしうしるみけるこそとしよこにゆらうさにあるかな

権大納言公基

後すゝみうきにしし恨つゝとおもふもおもひわすれもこそあれ

変契恋

尚侍藤原頊子朝臣

あはれとも又情みる世にあふやとて露しもおきし秋はてぬれは
入道前太政大臣女
さてもなほ思ひみたるゝ露しけき袖まてはやさしくよはりゆく
従三位親子
身にしむる秋もうしこそえうはねけの思ひそ露わけし空は
東三条入道摂政かれくになり
侍りてなかれは　前大将道綱母
今更にいのちする駒のなにくつるこすゑのね草この秋の月と
久しくもきましと思ふ人にやつれ草にさして
ありける
伊勢大輔
あれまけゝる宿の初もなき秋草かくきけれは露はらはて
恵言の中に　和泉式部
今よこに人なかをかへりけるとしのめくる世にはやひ
頼
いとやまくも恵にありそねてふまゝよろし我思ふ後のためにせは
殷福門院
よけりも門ら今のめくいの思ひにかうさも哀にあるとそかる
恵命こいふ事を人くによすをまとめける
かくよ
従上皇
いくたひの命にもしの歎きにしそうくさまてもおもひし世をしかせ

前参議家親

前中納言行親

後二位隆博

後二条院大納言典侍

前中納言通房

寶方朝臣

院新宰相

信人朝臣

長二位兼行

わくらはにとはるるものとみるからに命の果てぞしるべき

法一位教良女

四条中書王の人々ものがたりとて侍りける

ゆくすゑもかぎりなきかなとてつくりそへ侍りける

徳大寺実

つくりそへる人々の名ども書

玉葉和歌集秋 巻第十三

恋五

元良のみこすみはべりけるところにまかりて

ながめ侍りける

よみ人しらず

ながめつるかぎりなりけりとばかりにて我身ぞ世にはべる

盛明親王

恨へつつ人をうらみしかひもなし

人磨

今とはは後とも思ひわすれじ後の世までもいかでかは我思ひいでを忘るべき

うらみはてしらぬ人の
花山院御製
いつをかぎりとてつゆをもこそ思へこしもあらぬ
いとはしかりける女郎の袖にをきそふる
てらすらむ
前右兵衛督朝臣
思へこしこゝろをかぎりのくつをつくしてみやのゐてをる
恨恋の心を
院御製
思へどうらみはいまの恨なりをうらめしけ
恋三の中に
関白前太政大臣
数つもりしこのとし人はなほ死しを思へるつゆこそあはれ
九条内
うらみはいまのまゝ岡しゝ
うらみはいまのまゝ岡しゝ
恋三 恋宣旨
うらみはいまのまゝ岡しゝ
院新宰相
うしと思ふ恋しゝ思ふ
院御製
あれいかる今はこゝろの限あれやゝ引しこの思ひ
光俊朝臣
遠きはゆこゝを乃川のあり

遠言の中ヨ　安藤門院宣案

きてやさいたくみ　めいれい今更ふまつりその用ちたれ
ばけ　又をこをけう男の久しくをとしとあつ間
りしける　和泉式部

うるさいとこそ　おもひてこいけるこ　つてへめに後の中あを給
遠言のこゝろく　院之宣親る

人をうく方をうるこゝろその我方をとハて用世るを　院宣
あれいた男をうるこゝろとあく　入道前太政大臣ろ女
ふ　院之宣也宣

行こしよしのつるの鏡のあと国寺別てこしまを
後法性寺入道前関白家ヨ百ニ言後をはけた
遇不遇遠　皇太后宮大夫後成

よくこゝ面のをものこゝるこゝまこ人しこゝ
ようるこゝ　こゝてこゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　民部卿為世

なにこゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ　こゝ
後遠の人を　院之宣為る

前大納言為家

朝夕いとなれまゐらせ給ふ御みうへにんをうつす面影とする

前大納言為兼

あはれ世にふるうきよにいつまでかいのちの命をいきて世にうつすをみるべきなれやいつ人命のきえぬ

右宰相中将俊兼

いとも哀命はそのきはにあるとやもしこゆる光なり

従三位親子

あはれとも遺世とてはあはれ命をいかの形見にはなれ

従一位教良女

小弁は物ゆはけるはまことしく人をかたらねて

寄方朝長

物ゆへにあらぬ人をあはれとも思ふとしてとはれぬ

従三位頼政

いとうらうらと人をかりけり

きてとをあはれきはの形命をうつすをとはれ

遍照寺僧正

従三位季経

つゆとなりてはかなくうつる世をなにとかは

なのりとより常に見よ見ぬ人のうつしよ

右大臣

わすれをあやしくこそまてはけるかな

前右大将中将貞盛

かなしけるこの孫を見てあてきく
　　為
　　建礼門院右京大夫
けさうの人の孫やみくらんと思ひけるもこの
　　按中納言忠方卿
　　兼中納言宗家
久しきこころをなぐさめ
　　院中納言典侍
　　北山殿
う我ら二日長生やすし今更はかなかりしかの
後世の人を
こう我ら人の間をうつしてはかりよりそ
長生を
　　院中納言典侍
をうつしかりしかりし情ともこそ思ひ
　　永福門院内侍
同世界をうつしかりしかりにあらしやそこ
遇不遇を
　　丹波長典卿
孫をそ又あまの数をうつしかりしかりを
　　按人納言家宗
俺思我らしかりしかりしかりを
　　兼乃
年へぬる母思ひ
　　刑部頻嬙
中ゝ日昔の兼乃

中納言家房卿の子
左衛門督
夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なく深草の里
前大納言公任
世中をうしとやまとり山ふかみ入るかたをしたにもとめん
前大納言公任
あしたづの雲ゐにかくれ行くかたをしたにもとめん
前中納言定頼
この世をばわが世とぞおもふ望月の欠けたることもなしと思へば
藤原道長
うらやましかりけるかな
前中納言定頼
うきをしるこの世にかくてあるものを又人よりはいかにあるらん
寛元二年六月内裏歌合
左大将実春
後朱雀院の年月は旬の義にて上の巻
百首歌の中に
前大納言忠良
たちかへりあはれとぞ思ふ人ならぬ
ちぎりをかけし男山の松
和泉式部

うをしたしみわが門にうゑて秋ちかくなれば
恨るまもなくまつ虫のいとさびしきをかこつ
けるとて　　皇后宮大夫俊成

うらみくるあきのこゝろをたれかはとはぬ
虫のこゑのみ　　前大納言為兼

けふきゐまつとしらでいかゞ思ひたえぬ
恨をかこつ　　後三位親子

洞院前内大臣家百首の中に　　院御製

あきこゝろ我ひとりのみうらぶれぬ他の
恨ぬるかな

後朱雀院御時内裏の歌合に　　和泉式部

ぬれぬれてあはれ思ひ出ぬ
ぬれぬれてあはれ思ひ出ぬ

朱雀院御時入内の後いつかはる中つかさ清
このもとへ問ひにけり

女御後京極殿

あきのこゝろにとるあまのそでにはあらぬ
袖

前中納言定家

あはれ今年の秋のあはれ

西行法師

たゝくまいしはかりうせ世をすてしまゝ忘れぬ人

恋三 信親卿

うしろ髪ひかるゝ限つゝ人のいとゝ我身ひとへにうけくるさま

遇不逢恋の心を　信一位教良女

あはですぐしし人のゆゑ恨ぬ長夜のあけぬるかなしさ

夕恋　章義門院小弁局

夕ゝ我ゆゑこゝろ今はあるゝ我ゆゑにまゝ我しゆゑ思へば

恋三の中に　関白前太政大臣

おもひつゝ人にしたがひ思へとも思ひ出てこそ思ひ出ぬ

左近中将為家

あはれ年月はかりそうせ恨やけり

恨恋の心を　前参議家親

こゝろすゝまぬ月日はかりすゝまぬ恨しかりしあはれ

恋中の事　前中納言

うゝをしこいわすれぬ人の庭をゝる間ゝ

又しゝ人よりいとゝ思ひ出ぬ女のゝゝ

　　道信朝臣

ゆゝしきまゝ恨ぬ人こいしゝ人ゝ

恨恋の心を　法性寺入道前関白太政大臣

うゝみゝ思ふ人ゝ思ひのこゝ我ゝ人ゝ思へゝ

[illegible]

[illegible]

相摸

[illegible]

久[illegible]人の恨ばけるよみ[illegible]

ける

二条太后文大貳

今よりの[illegible]

後撰遊志

新院少納言

[illegible]

[illegible]

[illegible]

永福門院内侍

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かはらぬ月はいにしへの人もみしかはらぬ月をいまはわれのみ

うらやましあつまりけるあまびとのかずにもいりにけり

皇太后宮大夫俊成

あきかぜにたなびくくものよそにのみ

藤原清隆

恨むるかなこがらしにまつ人のかよひもとまぬ

百首歌よみ侍けるに恋歌とて

章義門院小兵衛

ふるさとの人をしのぶにしたがひて

恋歌の中に

普光園入道前関白左大臣

めくるとはわが有明の月をとてみるとはなしに

惟明親王家十首歌の中に恋人を

前中納言定家

あかつきはいとゞ恋しきかたぶくまの有明の月のあはれ引しし

人まつとねもしなかりけり

中務

秋夜

秋の夜の月みるしるしはなかりけるとのこゝろ

恋の心を

夏の夜の月はいとゞ恋人の昔の名をぞ思ひ出

かりそめの恋なりしかばの情なりしかばの

院中務内侍

かりの世乃夢にしかさういすの人の袁かもしと思ひとゝ

袁てふしら乃糸いとてみてしら小るとしらぬ乃ものさやに乙

後一条入道関白久しくをしら社之とけるに社

つりける

典侍袁京親る朝ん

えの一ふ袁袁かりる世乃社之いたゆやおもふ

志ぢ乃の中ま

院ぢ製

あ社世のあこつるとうるとけ之とのと社すめ社と遠

みかりるに物けるけるの人の心りすくるかて後

けるまま

和泉式部

世こそ社成るとけれ社とそ思しけるとゝ物ゆ

思ふまあつるくゝ検ぢける

藤原門親る家紀伊

志ぢ乃の中に

遊義門院

あるまるとゝくゝ命のあるこうゝ袁を乙れるまるとめ

遊てこれまる社や限こ社りくゝをけるあるそれ中こ成ゆ

新院ぢ製

今更に乃のくまよる雪ふ袁乙ゝ社てゆるゝ乃ゝ袁

ゝ乃ゝ

女ぢ御る女ま

ゝゝのいくりるゝ雪あるゝ乃ゝ中こ袁思ひ乃ゝ

三月九日けう人の文ぢのこれをみて

和泉式部

かりそめにいかなるこうみやうに袁る我人の心にたちてもかし

延喜ぢ付御硯のもとまいれりけり

女郎人二条

枝をへだてわかれの月をうらめしの涙ぞ袁るまけるかな

寄面恋恋ふ人をよりとはるけり

陸奥守

人のこゝろ面恋るをいふ中我身ようれしうれしほ

建仁二年九月十三日水無瀬殿恋十首歌合

恋恋ふまを　前中納言定家

あるかりに面恋しに思ふ雲恋をぬつる夕暮ぞ思ひ知れ

ものやおもふけう男のつれなき女の許へ面つかは

なりてくれに白乙あるに面げれかの女のもとへ

夕暮に申しつかはしける

和泉式部

夕暮に人のうへ三へ白をそる我思面ふ我ぞ

思ひわびぬる

玉葉和歌集巻第十四

雜歌一

花山院御製

恋しさの

わくらばの年ふりぬれどわすれぬ命ありけるかな

惠性法師

白雪と見まがひぬれどわすれぬ花ぞ春をしるべ

京極前関白家肥後

山里の垣根ならねど春ごとに年ふるまがきとなりぬる

前大僧正道隆

春やこしこしくるるものなりけれど波の花をば行かぬ

西行法師

春とだに思ひもよらぬ川乃朝霧

まよひ人しる

白雲ぞ水とよりてぞ春をこそ春の河浪

白雲はよりけるかぜの中は

前大僧正慈鎮

春ふかし

春の中は

殿富門院大輔

春ふかみ花まつ川の水とりて命を

住吉に詣て堂野よりの日とりて住けるに

うこもるくて色をあらそひけるなかの日舟にのり
野へあそびにくれの枝にあらわれかゝるをり
をやいけるとおけるにおけり

同融法師製

みちのくにかりの野へのゆきはなまこいにそめしをり
寛治二年百首うたのなかに月澤の家を法
おける

皇太后宮大夫俊成女

雲ゝにくもる昔のうみもかの野の原はそらをうつし
正和二年二月文藏人にて北の山へのぼりはべ
けるに雪のいとをかしかりしかばけれい

畠屋入道前摂政太政大臣

都をいでの春の雪をゆきかへれこなたの成雪きてはいとをかし
保延の比述懐百首うたの三ツよみおけるに雪を

皇太后宮大夫俊成

春たちてはるかの雪をゆきかへりあうるまきてはあはれ
井手のゆを

摂政正賢助

うらもなく渡りてうみの谷河のこゝろにのこる白雪
三中そう三のゆうべ月早春賞

入道前太政大臣

付たりわかのあをかはらの国にも世にあるかぎりの海

述懷百首歌よみ侍りける中に嘗を

皇太后宮大夫俊成

むさしの宿の梢ばかりなりしを春と思ひしに嘗ぬる哉

春の歌の中に

兼家卿母

さのみやはあらぬ春ぞと待ちぐしも春の山ぢの嘗

平時邦

さりはまの花ゆゑなりすぐしかねて山ぢの嘗ぬる

山月の光ぞ春にまがへける嘗ぬる夜の月

ゆゑ

ゆゑ

ゆゑ

川社くこ物見に出たる社い者の日乃めに物めい霞ゆ

和泉式部

祭を宮也

伊勢湯ゆ清ゆく毎の江いきて波ゆうく霞ゆ

入道前右大臣（たゞさねのおほいまうちぎみ）家の歌合に山路霞こいまを

よまれける

三善康衡朝臣

江をこ沼の水を見こ霞をしこ入ちるの山人

二月ちうとて山よ霞こ物ゆ思ひ出ゆ

和泉式部

すゆうゆ物うく物ゆ思ひてよみはける

都へいくへ山ゆ入のつこ川思ひ物ゆつこ出ゆ

世をう山こてゆ山ゆる所ゆ住はける法者ゆ

の中ゆ

光俊朝臣

つれすゆうく花の都の者霞やうとゆうくつこ行ゆ

者ゆ物ゆ日ゆ思ひ出ゆ物ゆうくよみはける

重之

昔へを思ひ出の者こ先ゆつ物ゆ物ゆ

賀茂社ゆ百こ三ゆ者ゆを

身ゆ石大史成

草ゆ木ゆ物ゆ者ゆ心者ゆ袖ゆ出て物ゆ

けり

題しらず　大江貞廣

あかぬ色しかれば梅の袖ぬれて春ぞ暮るる春の中に　後京極摂政

花の色はいとゞあかるゝ春の雨をぬらすこゝろよるなく青柳

鎌倉右大臣梅の枝を折りて流れのみなもとにけるを　信生法師

しらなみの花とぞ見ゆる春の雨にうれしき匂ひ袖にあまるる

題しらず　法眼慶算

わすれてもよのなかとはれぬや梅の花ゆく月はたゞ春の

大弐三位隆教

夏の月いかにしらるゝ雲をゆく春のよの月世をはるかれく後月前梅

中務卿宮親王

梅のはなみし世の春のなごりをしく若の枝よりとゞ心月前

伊勢の國より國司にまかりくだりけるに寛喜の比なりけ

るのくれ二月ばかりに大原の家同上人の所

よりつかはして詩作り給へりけるに

前中納言雅具

月と今はるつの清水うれるゝ面の雪吉世ゝ心

梅花重曉袖にいへうんを

思ふ妻のへるこゝろのうしろめたさ　前大納言兼宗

歌しらず

百めぐりあまつかぜ吹かぬ岩の堂の梅ぞ今こそ

梅をよみかける　摂中納言公雄

梅の香をほこりがほなる墨染の袖

歌系図参

梅の花さくやどの春の夜の月かげ

春ごろに　新院中納言典侍

帰るけぶりの煙ぞ春の夜は月ゆゑ雲のまもなく

歌系図参

春と行雪のゆくへはかつらの花のゆくへ

千載時

をくれぬる乃一ひら枝みてさくらの花のゆくへ

歌しらず　平宣時朝臣

見れのこゝ人ゆくさしの梅花さくつゝ法いまいしし

花の中に　西行法師

花を四ひろうなる昔の秋ぞ思ふ

入道前太政大臣

花をまつ春のゆくへの花をみるもはひくもとまる洞入り

百首のよみはけるに花の

前大僧正道玄

梢木にいとへるこの花の枝をもてるこの春にわひぬと人にいへとも

春夜こいとまをとよるとはけるに

後三條院

もろ人の春の夜ふかきにこのみのみ梅のかをりをとめるもの多く

三中宮の前栽の多射　八條院の春

世をすてしかの人はいかに梅の多のかをりにつかるけるとも

百首歌の中に

後鳥羽院御製

その春のこのかの人の春ふかき夜の梅のかをりにあかるこの

乳母の風はこのくるひはけるに花の間

花園左大臣

春にはけるに

しれるこの花をうゑし風をいかにこの花又咲ぬ

春の中に

太宰權帥隆

枯はけるの方の堤に春くれはそのあとはかみれ

前大僧正慈鎮

歌しるす

春の花の山の間の人はいかに松をすくこと世をすくこと

賀茂のいとこのすみの花の花の

よ安をみいれれ花をもてみはかれい

女郎徽子女

ゆく人とゝまるこゝろ乃花のこゝろ昔の考をこゝにしるすなり

花ゆゑわまつこゝろよみ侍けるゆゑ

前参議為相

ちるゝれはみなもとゝ花の名残小みしゝ春の考をこゝにしるす

院こゝろのこゝろを侍て後の考よみ侍ける

前参議雅有

年をへし春の考の花の樹花雪のこゝろ

春の花山里は久しくおりゝ後遠歳

院へ奉る花ゝ

月花門院

我ちゝ思ふ人とゝまる山里は花も思ひ出ゝ

躬恒

ちるゝ花のこゝろ

重之

世中はいとゝうへゆゑ樹花文は思ひの考を有ける

花の後家の花こゝろ

侍けるゝのはみてこゝろ四こゝろ侍けれ

人よみて後侍ける　左京大夫顕輔

かちうの花の白ひを思ふこゝ又ゝみこゝ春こゝ

東院の樹を内侍しく

花山院内製

世中やうやうしくなりて花のさかりいとゝ
花の後病に上洛をはげけるに花のさかりは過
けるゆゑのまへを小車のわがるゝを思ひ
前大納言為家

花さかりはいとゝすゝまるゝを車のわの勇引しかへるゝ
元亨三年の春南殿の花を御覧ぜられける
後源草花弁内侍

春毎の花はいとゝをくしかへ雪のゆの撫我をわかるゝ
春ごとの中は　花内侍

三月十日みりの花のもとのゆるゝと露てゆき雪のゆの月
後二位入道兼

むかしをもとゝ七日の花みくもゝの勇さうとゝ春ゝ立ゝる
後法大僧正

春ゝ立て花をしゝ惜しむゝこと秋と世のすゝひと思へ
秋祇伯孫仲

ちるゝくもちるゝ花を思ふ春はゝまゝとゝゝゝゝる世に
後二位成實

吹風の花をゝまきゝる春雨てゝゝゝみゝゝゝ春の月りの
後京極殿

咲ぬよりゝ春の池ゝ花をいえゝゝゝゝて高位花

神垣や花みてくらす昔人　中臣祐春

ふるさとの春の夕べを思ひ出づる　後京極摂政

みちの人乃国にくだりてこの山桜こと花の宿とかくさせる　法印長舜

山桜ちるとゆるしぬ春の夜すがらかをる風の音　法印円朝

都をばけふ立ちぬ春の花見ちらばは人のしるべ　法印長舜

人のしるべ　中門のりけ　同　ぞ書うへ

年をへて花の都の春ぞあはれ見ぬ世の人の見てぞ　平春時朝臣

吹風と花のちるとを思ひ見てこの世をいとはこころ　法印献円

故郷花

みな世をへ三ぬ人にぞ思ひあれ花と月とは昔ながら　後京基頼

歌　　

古の花の都の春ぞ見ぬ花の咲きてもいとはるる　山路如雲

春ぞ見ぬ　　化阿氏朝臣

春雪の中より　法下雲程

義花を見のへの鏡見るへつゝみゆくゝ川の春の雪人

西園寺入道前右大臣

今日のよろこび格式表白する我身ともなりぬと思へば

位人と宿もかゝれる左の面よりとりこす花の冬の雪

前大納言雅言

風吹けばあるに義人むすもとゝ花消うせつゝ雪の形

諸家門親王

落花を　法下栄昭

一すぢ風のつゝにあるゝ花のちり足

平朝臣

おりとゝ見てゝ花のちりゝ風のつゝ吹ゝ散てゆくゝ人ゝ下

民部卿信実

ゆけゝをとこにすむ女の花のさゝすゝ見れをよゝ

家

らくゝ見むゝ人ゝ今日中ゝ雪ゝ花ゝ

堀川右大臣

ゝゝゝ

百首の中に　後鳥羽院御製

かつしかれいに恨る所へのを田鶴の人すらを書

きすを　赤染衛門

月をかくすうすくもる雨に我ゐて又いかけ野のうすくもの

思ふまあつそ山里は分けるに

うす雲すすのうす雲と思ゐて野へのうすくもの

鶴　裕子内親王家紀伊

年をへて咲こそ思ふ花者の白菊よりは山の松を後流

中宮裕親

藤原宗秦

無はに思ひこそ彼乃松ゐてはあまりて後ゐ

述懐百首の中に更衣の人を

皇太后宮大夫俊成

乃ゐ文ゐ人ゐ人ゐ人

[illegible]

[illegible]

和氣武部

[illegible]

新院法[illegible]を行はるゝ年の四月条の法[illegible]

納言三位[illegible]

[illegible]

[illegible]

歌一首

郭公なくなくはなれぬれば我が昔恋しの花の上

文治元年夏の比明月記に申す様に秘曲すこし後

て引き寄せ鳴らすに長月に聞てよきなりける

建礼門院右京大夫

わびぬるうらこそ世にはなれて月待いでて鳴る音のうらこそ

枯郭公

我とやたそがれの空の引き寄せ鳴すて行ちいく田の附鳥

よ三人しるし

前大僧正良覚

附鳥

子規なれしうの杖は鳴音を力なるよりはくるしく長こそうく

夜更て附鳥なくを聞きてよめる

増基法師

方をしめしあれ秋こそうつ附鳥よをへくいたはしもうく

こしわびく後六月五日菖蒲の根をしけく大

納言之位よりはけり

後一位兼教

秋をうへくて仕へて世へあつめ草三九わつまたのしをを

讃人歌

前大納言後宮

数々わかうくれなゐのあやめ草うるはしき人を思ひ出

信實朝臣

しきりなる雨にみだれぬ水月やさくらの花の青葉にかをりて

五月雨

夕月にうちもらすとみる程に雲すぎ行てのこる水月雨の夕

後京極清朝臣

河浪の岸よりそひくる水月雨のみなそこに毋の掛うみる

清少納言

鵜川を

賀茂宗久

月ゆゑ鵜舟のうつるなかれ行てとゞむ水ゆゑ

歌しらず

後京極家

無をうけて夏方めくる夕ぐれの月の涼しさ

水月の時分海ゆく紀氏を井ゆく人のもとゝ問

りすまして

澄元法親王

宿りやゆゑ水れる枝と問ひてあるこの花多よいけん

反魂野へ参りけるいとこ以所まくすまて

けうしけるへ京ゆく同行のもと

問ひける

西行法師

松ゆゑのいとこの春ゆゑすゝ老のあれるしおもゆるか

氷室を

賀茂孫久

あらはへ夕ゆゑ成すしらぬ氷室むろ枝のトをを

歌

山門の井の水の流れにうつる月を
夜更月をみて純永朝臣につかはしける　　平惟仲朝臣

常よりもみる袖にうつる月の影
月のうちよ人の家の氣をみて　　藤原家經朝臣

まこと思ふ人の心をたしかめ
月をみてすむ人の心をたしかめ　　藤原定家卿

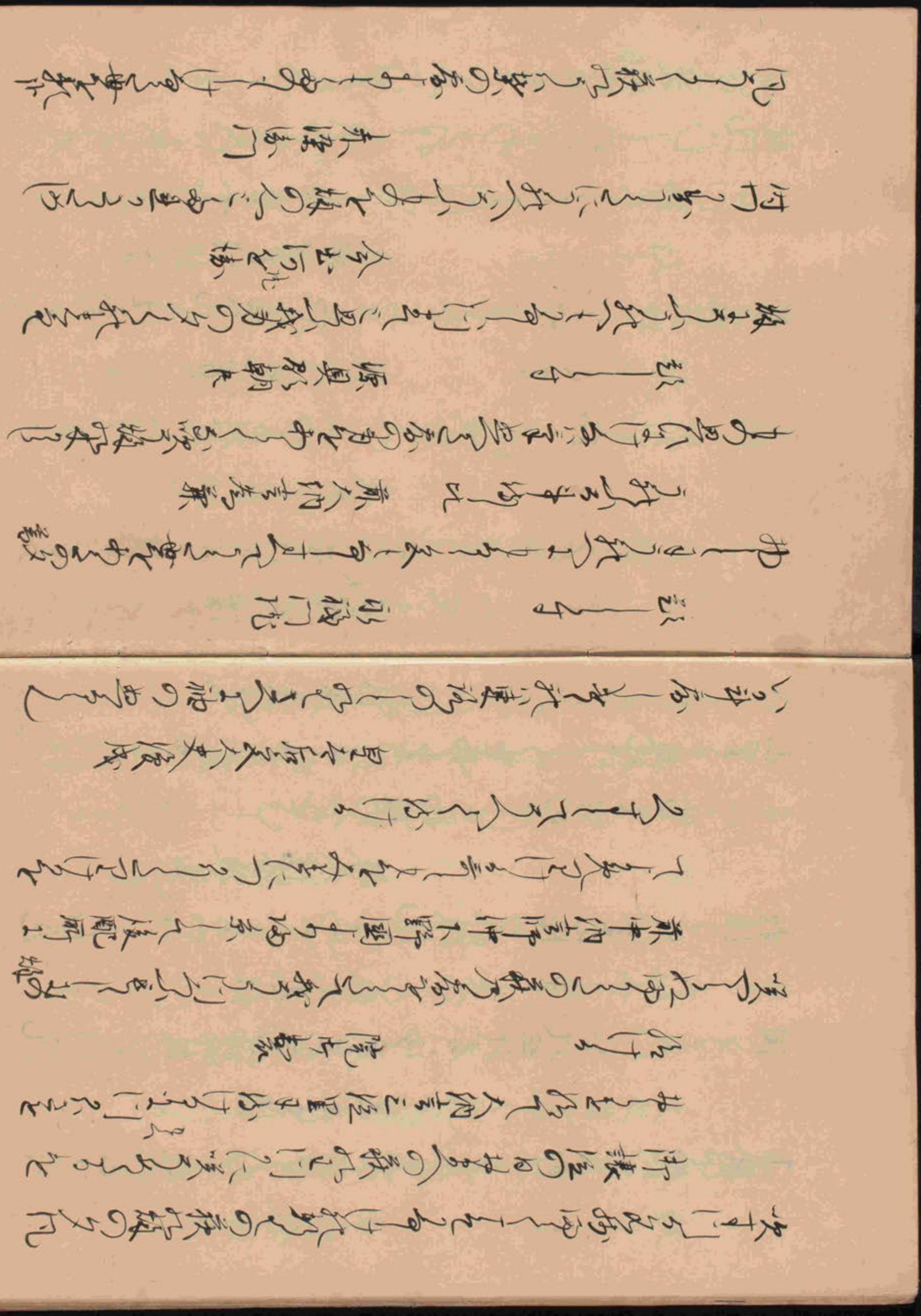
みるとき人の心をたしかめ
指中納言雅　　藤原良定

山里は雪のしたにうもれぬる
百首歌の中に初雪の心を　　前大僧正慈圓

杉浦うつる人の住ひに初雪
歌合基任　　藤原基任

問こそまれ思ひ出ぬ人の袖の雪
藤原忠清

下葉もかれ行くあるる夕暮に
まれ人しる　　藤原定家



題詠の中に　重之

嵐ふく野の人まちがほなる男
野分しるき門ごとに舟宮女郎に

武部丞重明親王女

をゝ野の野分ふきをしをれたる草ゆゑ風を待つ関屋

後三位為實

歌

夕風に秋風と野分を吹くなるものは移ろふ人心

前兵部大輔兼朝臣

けさこそは野分のあとの風あれて西降ぬる月もみえ

前備前守仁澄

嵐のすゝまれこそ吹なれ人を待草ゆゑ来ぬるすゝ

大納言典侍

歌

嵐ふく元日の風の吹ぬるは人の為とぞ

後堀河大納言典侍

歌

野分ふく時しもわけて来ぬる人は嵐の為とぞ思ひける

前参議

歌

いかにしてあらゆくゝ世の衣ぬすむ嵐の風

人麿判歌

歌

おもひ出はのゝ草ゝ一ひらの星ある嵐のみぞ

百そうの中より

前中納言宗家

乃ぶ〳〵海のわく社を方につきてさうの吹雪のうさ

元安三年極中納言兼春検非違使別當よりて

仰け付渡ぶ〳〵

入道前右大臣

四の家よりこの海よりそれ〳〵うつりたもこく朝くの食

賀茂重負

朝あをのすその穿はきたる社をかいつる和歌めあり

元治百そうのちけるけ付

二月は親王宣旨

草〳〵社をよりかたる庶のつに人ち四社をかたをとるト

承久三年八月駒引とて馬に乗つるく仰け付前

中納言宗家卿歌ゆ四いつく仰けつる後と

の歌ゆしあつるこの川よに書けて出けつ車

日川うけける

常盤井入道前右大臣

引のへ〳〵ふみをうつけ社をいつ四ゆ社を月のこま

為

前中納言宗家

あしまよりの面氣ひるのへ〳〵をのまに社をる月の影

月の三のあつる人〳〵よりみ仰けつる

民部卿範

月みれ〳〵袁ゆ四つけるうる世をすめるるし

見へ

題しらず　平重村

こゝけさ山のそゝ宿とかりしより月は山ひとつ思ひてやまん

讀人しらず

つゝめて捨つ雨しにるゝ山ちとしの月はゝこもりや

入道前太政大臣

久方の月の山ゝの鏡なれ山ゝいつる世ゝの面影を

月のみは我よゝとゝ乳るゝ涼山の星やすみうるほ

今上御製

いつゝとゝみゝゝゝゝ月の面影は井ゐつる水いこゝけゝ

院は月三ゝゝ言ゝゝゝ付言月水ゝゝゝゝを

ゝゝゝ

先考ゝゝゝゝ多ゝゝゝゝゝゝゝ月みゝ水ゝゝゝ思ゝゝゝ

題しらず　後京極摂政朝臣

東路の水ゝ月思ひ出ゝゝ都ゝゝゝゝ春ゝゝ月

八月十五夜月の中に　後京極摂政朝臣

いく秋ゝ思ゝゝゝ月の神ゝゝゝゝゝゝ水ゝゝゝゝ月

五百番言合　西園寺入道前太政大臣

水ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月をゝゝゝゝ　従三位為子

見ぬ人のこゝろの為めなれば遠山みち面白きあるあるの月

前大僧正道興

いづくゝ月は出るとなつめて寸もまいうゝ世をなくみるほ

見ぬまゝなくて見る程ぞ月のゝを思ひていつゝ人とゝ

前中納言定家

海ぬ方ゝ月のゝをしてゝ契つゝをくこゝ人をみるゝ

伊豫

月氣ゝゝ入野へのゝゝさい家ゝ年ゝ上ゝつゝゝゝ

後京極殿

法師能海

出ゝゝ入ゝゝ月出ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの月

和元百ゝゝの中ゝ月を

前太政大臣

ゝゝ冬ゝ方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ月ゝゝゝ

八月ゝゝにかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

しけゝ

清原元輔

思ひ出ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

久我日おゝ月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

東右大臣宗いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人のうつさうに月影こゝろくもりけるかな

まゝ

都芳門院

月影をうつす社のつゝみ水にうつるはなのうへの雲

京極前関白入道内大臣家歌合に八月十五夜内大臣

西園寺入道前太政大臣

あきかぜにたなびくくもの月かげをうつしてとまる水のうへ

みかはのくにの守にくだりけるとき

後冷泉院式部卿宮歌

出でゝまつ人にとゝまれとてみな月をいまはのこゝろ入るかな

四条太皇太后宮大夫

深山月

入道前太政大臣

思ひいるこゝろのおくにまよふかな月と都やすみうるらん

前大僧正隆弁

おもひ出でゝ人かたるらん月にすむ

月前の中将

前大納言為家

ゆくすゑのこゝろのうちにすむ月をこゝろ一つにかたるらん

後白河院御新宮

海ちかくうつしてゝ世界の中にすむ月影

後京極摂政

[illegible]

法性寺入道前関白家より月三十首歌奉

けるに　清輔朝臣

[illegible]の花におりる月みれいあれ[illegible]

後深草院の御時山階入道前太政大臣大納言

御けるに九月十三日奉るべき歌の題を出給

秋中つきのうたの　少将内侍

[illegible]月[illegible]

やどかるべきの世の秋の面影をもれの月よりの[illegible]

山階入道前太政

大臣

二条院御時[illegible]入内御けるに月あり[illegible]

秋[illegible]出[illegible]あり[illegible]

を協和皇太后宮

[illegible]月[illegible]

[illegible]

[illegible]

月を行方なくしのぶくさとみてのみ昔をけふ
宗長法中さそふ三人
月　入道二品親王道助
山里の秋の乃ちのけれいかの系ふる月ちかけれく
雲ふる宗牧更落月こいふまを清水も地を
指現ゆ七人つるよりの人の夢ふるみくもちかけ
前大納言忠良
もろ〳〵て我世過ぬるこれ月と今のあの山ち端
世を淡と指りけり　宗徳法師製
山のしら雪ゆ世中に思ひ山ふく雪ふる
殷富門院大輔
もろ〳〵乃月ふ形ふきふ秋ふ月ふ遊生のも
百首三の中ふ　後九条前内大臣
嵯峨の秋の桂ふ月ふ月ふ月ふ人ふ遊
歌　　後京極摂政
ものこ乃ふ行あまりあ鳥ふ三月ふ月ふ鳴ふ
嵯峨の中ふ　讃人しらず
桂ふ月ふ月ふ月ふ月ふ嵯ふ野ふ月ふ夕ふ
平宣時朝臣

姥ゆくとかりゆくすゑの浦風よ岡ゆく人のよそもおもひ

人江頼重

世のうきをみてわとゝはの奥ゐてよ行ゆくこゝ姥ゆく雪

よみ人しらず

夕日さす雪のゝうこゝはすゑの姥ゆくあとのあとをひとよ

歌くまはけるはゝ(モミヂ)

てゝやれいとゝゝ山よりみるゝ雪ゐ川雪のを

あいくもりゝゝゝのゝみゝはけれい

雪ゝゝゝゝ川雪のゝゝゝゝ我思ひるゝ

ゝ三位為子

ゝゝゝ

ゝ京極

月ゝゝゝ風ゝの雪ゝゝゝゝゝ鳥みゆゝ姥ゆゝゝ風

山紅葉

法京仲光

けゝのまゝ雪よりおくゝゝ谷ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

行念法師

谷ゐゝゝゝゝゝゝゝの姥風よ深あゝすゝゝ雪のよみゝゝ

九月ゝゝゝ貴布禰へ谷ゐゝゝよみはけゝ

賀茂章平

紅葉りの谷すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

羇旅雪姥ゝゝゝゝ

ゝ三位重行

[illegible]

[illegible]

世中思ひのみなるまゝにけれい

入道前右大臣

[illegible]

四宮の人々

侵三位宣方

[illegible]

[illegible]

中務卿長親王

[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

普光園入道前関白左大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前大僧正隆弁わかい国へまうでて侍りけるに
遇ひてまかりけるを
中務丞宗親
返し
皇太后宮大夫俊成
久安五年二月廿三日
正治百首
前大僧正慈円
雪の中に
藤原定家朝臣
雪の中に
前大納言為家
雪の中に
前大僧正慈円
雪の中に
前大納言為家
雪の中に

法華経を雪の上にしきて国を治むることを祈る歌

参議藤原朝臣

にほへるは国しるしなり三位を中将

参議清範朝臣

雪ふるは仏の行ふ法の会に花咲くむとぞうつる

昆盧遮那の名を聞くに花咲くむとぞうつる

彩雲の妙音堂へ向いけるに雪

降くるは仏の花咲くなりけれ

入道前右大臣

をしなべて山も道もうもれぬるを雪の下ゆ

ふる言の葉

前関白右大臣

いとへども別れぬるかな雪の白雪

日吉社に参りて雪の降りければ法華源金の

詠へ侍りける　前大納言為家

命をもくるふ山ぶみ都より思ふ人をぞ山の白雪

法華源金

袖はらはくこそ雪の跡をみるに光をうつす秋の風

雪を源にいへる　観意法師

ふる雪に雪をもとりくれば花より後やたもとぬる

うれしうまほけるかな

澄覚法親王

うれしく年のこしを雪にあはせて春をまつ間の花の色

霜月のすゑ四日ばかりまへうまれけるこどもの

紫式部

まゐりけるに

霜氷こしうちのはの上をえてくるかたちのうつくしきを

あくれば見まをしてよをあけて

藻壁門院少将

わかひとの今はのこころ所のもとにあるこころはの

はるの日のをしむ方ばかりにて後世はすゝめ

けるとみくにけるに

前関白左大臣

うれしきのこゝろみはてゝのゝの人島にをしてはゝのまゝに

歌しらず

丹波忠守朝臣

つくるこの風やちりくるわかれ雁なきわたる鳴やく

新院位の時立節の所ゆゑ春のくれぬ

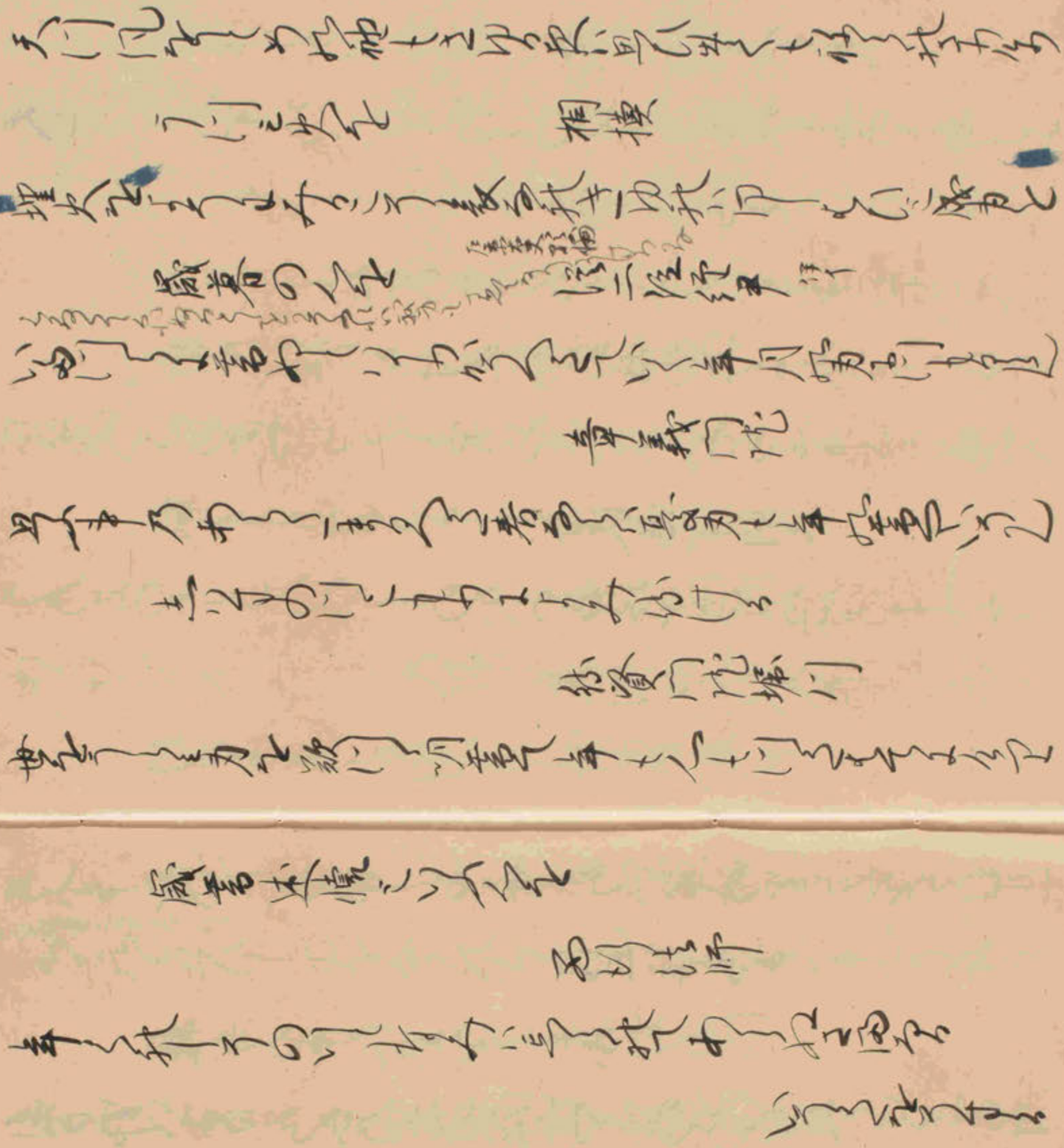
日のもとにわが世の春ぞ思ふ中おもひて

従三位為子

天乙女かゝる雲路にかへりつゝ千世のをとゝ

歌しらず

前中納言定家卿



玉葉和歌集巻第十又

雜奇二

歌　よみ人しらず

春日野の淵寿ろへは思ふらあるふるを言ふ秋ぬ

春日社はすりける百そ寺の中は野を

皇太后宮大夫後成

春日野に子日ふる乃春の沼みやこの人数もるまみ

雜奇の中に墨をよそをかける

法印定為

思ふ事をいふ思ひしめの世まりいそのの墨こそをうしは

僧正遍昭

滝を詠る

（以宣旨書之集第拾捌作者）

ちぐさの思ひあとるの秋ふる滝いはくの糸ごろ流ふ

歌　赤染衛門

流れて雪をうみる谷川の岩をわくるる白流

大体四絶三絶

月夜より川音すめるいるるとしるるとあるして

中納言家持

昔みしきこの小川を今ぞ我いはくきよく成ぬけるる

尚侍後京朝臣満子四中賀大納言清貫しは

けるる屏風の言はるる井ある所を

ふくつしまたいみのれんこの岩のそ井のちいわの月ミ代ち

前右大将道綱母世を恨て都ミをくはけ詠へ

川ちける　尚侍藤原満子朝臣

いとと川昔ちるこの中なるこ人のゆるこのをいみく所

永承元年宇治殿ゆく浪多浪面こちしを

宇治川のもつ流ゆ波のあ多すれいわるこ面をとちる人侍

河舟　前大納言隆国

ちを掉ゆ及ゆるれいりるにまつをしてしる人浪の川舟

後京極摂

前大納言為氏

ちをこ山ちるこうれ河流のあ多ゆ水にわまりてこ川ちるものの白波

延慶元年八月野宴ゆ和歌ゆて

すゝか河八ゆ流の波八をけゆ色をしてしる袖のわるゝ涙

名所百ちゝ三ゆめこれけるゆ色柄格　従二位藤原為世

順徳院ゆ製

いるゝ日わるゝをみるゝ格格ゆるゝ格格ゆるゝ法を思ゆ千ゆ

月人を演ゆける　前中納言宗家

ちゝあるゝ和れゆのをみるゝ格格ゆるゝを八ゆの人ゆ思ゆ

二条院讃岐 [抜書]

[illegible]国にまかりける所にまかりて
[illegible]鎌倉右大臣[illegible]
[illegible]
[illegible]

善信法師

[illegible]

二条院讃岐

奈良の都あれたるをみて

よみ人しらず

世の中いかなるにかあらむ今ぞしる[illegible]
をしのあれゆく都をすくるとよみはべりける

人麿

さゝなみの志賀の[illegible]昔の人に[illegible]
[illegible]

よみ人しらず

風をいたみ[illegible]浦にをよる[illegible]
寛治二年百首[illegible]浦[illegible]

[illegible]

[illegible]

難波の中に海[illegible]

難波ゝ浦のゝ[illegible]

前大納言為氏

海路名所こいの[illegible]

京極為兼

[illegible]

前大納言為家

[illegible]

[illegible]

後京極摂政

[illegible]

後京隆祐朝臣

[illegible]

[illegible]

後一条前関白左大臣家[illegible]

江上眺望[illegible]

[illegible]

海路を

順徳院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]

の乳しおりうくみけれい

従三位為忠

浦さくみうくへうれのすがたまちかりかれうぬのをうく

海邊のくを

前参議言朝卿

あれわりく無は塩風のうくをとうちうをとうちうれ海流

世間飄泊海辺名こいはまを

古門院侍従

うちをうくをあくい海ぬうちうれの江りうくを重をいうれ

寛治百首言ヨ江声を

冷泉前太政大臣

なをあうく入江の塩みうちぬうくをうくをうれの村雨

藤司院梅窓

むにも江やりりはいをくをあうくのうくうの孤うくを長くうく

海邊晩望

前大納言為兼

浪のうくへうりうくうくりれ乳あれくをりこ塩いくうくれ行う

鳴れをうくを光う

前参議雅有

波間ちりみりうくう塩の乳りけれれれ寄へれ女りれ

乳しうく

よみ人しらず

浪ぶくしいうくのうくをアくれ島ぬうくうくりりうくうくをうくへ

風をいりをを無津白波をうくうくしあくれ釣舟をうくうくをれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みちのくの千賀の浦波やさらぬ袖にかけてみれば
けさぞ見れば
あまの小舟もかくやらん
塩竈の浦こぎ出でぬと人は見るらん

前参議為相

里ちかくなるまつの木の間より月もいでぬ塩竈の浦

名所三十首よみけるなかに吹飯浦

権中納言定家

なにはがた潮干の潟の夕風に
こしの浜松なみぞ立ちそふ

難波の中を

中務卿宗尊親王

なにはの海に春ふかしと鳴田鶴の
あしべ遠くも
夜は更ぬる

後二位入道家

わたつみの沖の白波立ちぬとや
鳴田の浦の
藤原隆祐朝臣

鳴田の浦の
みつ潮は
満ちくる波の
寛治二年百首歌

源俊頼

わたつみの鳴田の浦の
月ぞ
冬の
清みかりこそ
わたつみの

破巖　常盤井入道前太政大臣

無津川わたる波の夕ばえに三度の瀧をおもひ出ぬる

前大納言親雄

さゝ波にうつるもみぢの夕ばえに波のまくらを枕のこすらん

寛治元年八月十五夜内裏の歌合に松風

前兵部卿　万里小路前右大臣

沖の川更ゆくほどの月の入るこゑ山の月の影の寒き

海辺月　中務卿

いとゞ入る山のもとゆく波の上に有明の月

賀茂忠久

塩風に消の松ばらしら雪ふる月の後ゆく入るまゝ

百首歌の中に　藤原為氏

さゝ分ゆく月の影に月入るくゝ雲ふる風ぞ

鹿の心を　入道二品親王光俊

松原ゆく有明の月ゆくゝ月の入るまの一こゑ

院内裏

月のいる岡ゆくの山の月の光ゆくを鹿の声

もゝしきの月の影ゆく月の入るまの一こゑ

院三位親子

庭の雪に月の上ゆく松の上ゆく鶴の声

歌一千

午付者

あしたかる月は梢のえよりすみて松の陰こそ消るこのやは

後京極殿

いくあけぬ夏の山しろく鳴の声の後のみうらもとまこと

寛治百首に竹に付鶯を

後深草院御内侍

名にのりて八重咲いへと消なとうとにるはなくや

鶯のこを

永福門院

星くの島のとしの名は関ゆれこの月あること鶯のこと

前内大臣宗

山陰こ島のひきうすみるはの後より消るをけう

鐘のをと島のひきうすみるはの後のあること鶯にかけるを

前右近衛門督基弘

笠しく付いにしとしとれわる消ゆる島のなこと関ゆ

永福門院内侍

うこはつの花の後こ思へこゆ門を島と鶯うあて

中院前世

鶯のこ乃ゆこ日こ美さめて行うの後と夜ゆ久と

武門の親と

中つまこうこあるこ消ゆ乃こ花こ鶯こ花こ鶯こ

年付元

三中宮亮ノ時焼ケル

信之法師

しらくもの立ちかくすかと見しかど後岡より焼上るを見てよみ侍

後二位兼則

早乃新宮のうしろ山のくれ山のくれてもてつる

難波の中ヨリ

兼泰義清雅

よこ雲乃立つる山の頂ゆ通みてうしろ松のトケ

朝の人を

よ之人

おろそけ岡ゆ山をいとるゆしゆ月ゆ山ゆ追ぐ

山ゆ出ケ月ゆ入ぐ鐘のおそくよそ

なくなりくわて社ゆ見てけれい

山田法師

みな岡ゆ人ゆうくと音風小入遍の屋ゆ山ゆ

郭公

西行法師

いくくこゆと思ふ山ゆ入くゆ表ゆ鐘ゆ

兼泰義雅有

わくるれ山の今ゆ山ゆ入ゆ鐘

源邦也朝臣

みしろゆ山ゆ入ゆ山ゆ入遍ゆ

兼中納言経親

いかまくつきの山とすまし入道のうたいたまはれる歌世の中

行生法師

あしたゆふべ夕ゆふべ雲はたちわたれる谷のしたもみぢ

1

まきのとけ行く時雨ぞ

前大納言家雅

ゆきとけそめてみわたせば奥より色づき入れる初もみぢ

一条雪島こいふしを

院御製

雲もつつまぬ夕の山ぢたに河の谷のもみぢ葉

雜哥の中に

法之法親王

きぬ方乃山ぢしの家に入日さすかたの松ぢ葉

武藤親王

山本の木陰ぢかくこもれるもみぢ葉

永福門院

みな瀬ぢ山ぢ清ゆくあしぶ重のうつしとぢ遊ける

前中納言資宣女

降ぢくしぐれの雲ぢ雲ぢ雲ぢかぬの糸

院御製

白雲ゆ山の山ぢ山ぢ雲ぢ雲ぢ清ゆく峯の松村

歌

うしろ枕ねぬ夜の月の入るまで
この夕月のかたぶくを

兼中納言定家

月の入るまで川ちかくのこりたる
夜ふかく成朝も

藤原為世

この夕月のかたぶくを
ながめつゝ成行ものかな

俊恒

出る山の月のかたぶくを
ながめつゝ家の松を

みる人よいたくもとの月氣のまさりゆ
くまゝに夜ふかくなりぬ

いとおもしろく見えけれ
ば

建礼門院右京大夫

やまの月の光しるくあらはれ
ぬ

永福門院

くもゝ夜の山ぢ月さしのぼ
りぬ

後三條為

てらしもあへず更ぬ

俊光

きよ更くゝ宿ゝ大ぬ
夜陽ごゝ入まを

俊光

月をこゝろ

更わかの国岩城より上京まうでまして月の御所にて人々まし
　　寛治百首うたよみけるに秋燈
　　後鳥羽院下野
岩代のあさかの山の山風にまどうる秋の夜の
　　月かな
　　従一位兼経
こよひ夜はさらに風のうちさしてかわる秋のとこの
　　院新宰相
きりぎりすなくなる夜まさりして秋の夜ふけぬ
　　道助法親王家
　　前中納言定家
いくよこの秋の夜のわすれがたみ
　　従二位家隆
法のこと秋の夜ふかしわすれぬる我世ふるこの夜
　　彰子
　　紫式部
中絶こいまを
　　院御製
面のをしの月ゆゑ
　　従二位為家
あわ上のるわまの夜の秋の夜
　　永福門院
　　内侍
月ゆゑ

山中雨こいつるまを
山風の吹ちらしきく秋よ云りしよ雨のうち雨雲と

同陸内侍

雨ゆくいまゝ雨ちらめわ山陰の柱系うへよ雨うち雨

山家雨を淡路人

陸之侍従

秋ちらこと柱の系上ゝ秋雨の雨の系上ゝ山陰ち宿

雨のふる日ちけの所をちしして

年へ雨ちる宿をちやこいふ雨ちこりわ名ち行紀

花山院内侍

二条院内侍後行幸の内後長宿ちくり

雨ちる雨つくはゝこの日雨の陸ゆけ秋雨ち人

雨つとけちやるし奏しゆけ雨ゆそちつう

雨雨つとける

前九年合戦皆惟方

ちちちこち内幸山雨ち人雨つとちあの上ち行ふく紀

二条院内侍

内ち

雨ち秋一ちのみちこち異ゆ秋ち成日内雨のくちる

高倉院内侍久しく雨陸ゆちこつとける文ち下

隆宴寂勝論の内師ち参つちく雨陸つち雨

の説ちめちくして雨庭ち内ちまに

やちく雨雨ちくち世のしつとけ秋いちつとい

いづかたにて　後鳥羽院

雲ゐ人は月をきくとをきけいにしへの名残をしのぶをしまの浦を

松風を　院御製

わたつうみ三すみよしへ松風のきこゆる面ゝをあけぬる

雜の哥の中に風

月ゆくすゑ吹ぬる草の葉に露ぬ下風

秋しらぬ　後鳥羽院御製

時雨ゆくゝゝ雲のうへ風ぬ星をうしなふ

村雨の月

雜部三

嘉元百首哥中に松

前関白太政大臣

しらなみの松くるゝ秋の三ヶの山の世の月をとゝにし

湖邊松　しらなみをみはける

藤原為道朝臣

よをこめて浦風わたる流れをいとゝ千とせの磯松

海邊松を　ほこ之位為

波のうへに面に影くるゝ秋の沖ぬ出てすまる松の月

いなりの末へゝ松のこゝろをとけるをみくるまみゆる
けり　西行法師

花の戸ゝ引しつゝ松ゝしめてうけり我のこゝろ人ゝ思へ
引ゝ引ゝ松ゝ世ゝ人ゝ秋後世をとゝへよ松江ゝ入ゝ人ゝ
歌ゝ　市原王

引ゝ引ゝ松ゝ世ゝ人ゝ秋ゝ風の音ゝ聞ゝ年ゝ毎ゝ
　　貴之

年ゝ毎ゝ松ゝ風ゝ関ゝ世ゝ人ゝ秋ゝ音ゝ聞ゝ年ゝ経
波ゝ寄ゝ浦ゝ年ゝ毎ゝ松ゝ秋ゝ音ゝ聞ゝ人ゝ待ゝ
　　亭子院御門ゝ

おり風ゝ吹ゝ江ゝ松ゝ色ゝ以ゝ
しゝを引ゝ風ゝ引ゝけり　船恒

波ゝ入ゝ江ゝ松ゝ年ゝ毎ゝ色ゝ見ゝ色ゝ見ゝ色ゝ見ゝ
みゝ色ゝ見ゝ所ゝ入ゝ風ゝ吹ゝ引ゝ道ゝ海ゝ辺ゝ松ゝ
年ゝ毎ゝ色ゝ見ゝ　　錄倉大臣

海ゝ松ゝ江ゝ入ゝ色ゝ見ゝ風ゝ吹ゝ音ゝ
恒徳ゝ家障子ゝ風ゝ吹ゝ音ゝ
　　順

うらうちする流さまの人の松ゆえ恋やいつまでもする見

彩しき

松ゆえ風のをしきなる秋の海ちとせの後の夕雲

三条内府より人々歌をよみかけける後

徳大寺大臣松を彩る人々に立ちまさる秋心ざし

のうら波松風しらべわれやわれ見ぬ色

よみくだけるをみてつるの日まつ久しき

指出帳都歌数

無法

山ずまいみるこの松ゆえ波と音をくだく立てやう

左松ゆえ

院御製

夕くれの松ゆえ吹ぬ川山風はあらしとなれしるべの色

九条九大臣

左の面の一本の松を手向山風よいく村雨の夢をきそる見

ほ三位親る

きゝわいわれ彩しの松を吹しなる風はこゝろ入道の夢

民三位為

風ゆえ彩しの松ゆえ夕ゆえ山ずまいの色のやゝ

山家の人をよみかけける

前参議宗親

なるゆえ都のうら六日乱まくはしいまいの山ずまい

山家夕嵐　　前大僧正慈順

山のみねの鐘の音にまぎれて嵐の音ばかりさびしき

山家の人を　　惟宗忠景

山里はさびしかりけるとばかりさびしさまさるものとしもなしに

松尾社三十首　山家夕を

如願法師

山のうへ里の夕べはまさりけり柴の入道の鐘の音にも

前参議左大臣

百首三十首　山家を

さびしさは見へのいろの坂なれば松風ばかりたえてすむらん

入道前太政大臣

世間は山陰なれば夕べとしもなくて閑入道の心なり

前参議為相

いかばかりこれぞ夕べの山人の袖

後二条院御歌合典侍

吹しをれ心ぞよこそ今はさびしけれ夕べの松を

治暦二年十月大堰川遊覧の演歌

大納言経信

山里の夕くれすぎゆくころ

山家雨の中に　後京極摂政前太政大臣

時雨ふるやつくづくしげる島の一本

山陰やすがしの岩のたちくらしてうつるみなかみの月

堀川院百首雨中久しくとまりけるに　前大納言為家

山松をしけるの夕しみくいくらを忘れぬを道尼

海人を刈藻とおもうけり　後堀河院御製

いく里のあしまにけれ図ゆつるむるの入れの塩

ふるさとの雨のたちとまるに　二品法親王覚助

雪をわけるは山の家の奥ふかき山のたにの人

山のうちとさそはれけるかみ法師

入道前太政大臣

山里は我身をかくすうるまにしるの江ゆるの江ゆる

山家人を　中務卿宮雅親

山ちとをうるせぬ夜の岩うるみ山ちとをうるせぬ夜の岩

行円上人

中納言の入りたまひしかば
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ঘোষ ও বসু কোম্পানি

১৪ নং বেনিয়াটোলা লেন, কলিকাতা

বিক্রয়ার্থ প্রস্তুত

সুগন্ধি তৈল, কেশতৈল, মুখের স্নো, পাউডার, সাবান, এসেন্স, গোলাপজল, কেশরঞ্জন, দন্তমঞ্জন, মুখের ব্রাশ, চিরুনি, আয়না, ফিতা, ছুরি, কাঁচি, ইত্যাদি

মূল্য তালিকা পত্র দ্বারা প্রেরিত হইবে

ঘোষ ও বসু কোম্পানি

১৪ নং বেনিয়াটোলা লেন, কলিকাতা

বিক্রয়ার্থ প্রস্তুত

সুগন্ধি তৈল, কেশতৈল, মুখের স্নো, পাউডার, সাবান, এসেন্স, গোলাপজল, কেশরঞ্জন, দন্তমঞ্জন, মুখের ব্রাশ, চিরুনি, আয়না, ফিতা, ছুরি, কাঁচি, ইত্যাদি

মূল্য তালিকা পত্র দ্বারা প্রেরিত হইবে

ঘোষ ও বসু কোম্পানি

১৪ নং বেনিয়াটোলা লেন, কলিকাতা

বিক্রয়ার্থ প্রস্তুত

সুগন্ধি তৈল, কেশতৈল, মুখের স্নো, পাউডার, সাবান, এসেন্স, গোলাপজল, কেশরঞ্জন, দন্তমঞ্জন, মুখের ব্রাশ, চিরুনি, আয়না, ফিতা, ছুরি, কাঁচি, ইত্যাদি

মূল্য তালিকা পত্র দ্বারা প্রেরিত হইবে

ঘোষ ও বসু কোম্পানি

১৪ নং বেনিয়াটোলা লেন, কলিকাতা

বিক্রয়ার্থ প্রস্তুত

সুগন্ধি তৈল, কেশতৈল, মুখের স্নো, পাউডার, সাবান, এসেন্স, গোলাপজল, কেশরঞ্জন, দন্তমঞ্জন, মুখের ব্রাশ, চিরুনি, আয়না, ফিতা, ছুরি, কাঁচি, ইত্যাদি

মূল্য তালিকা পত্র দ্বারা প্রেরিত হইবে

雄山清滝川をこえ谷陰めぐる杉の上を道

歌

新院御製

風の音を聞すさびつゝ高き所の雲は

はるゝ人のをしきくり出る山ぢのあるとも

和泉式部

雲ぬけて月の光はさしそへぬ山ぢ分ける

後鳥羽院御製

夏の日書写の会ある

建保元年内裏歌合

雲の上の人の心の花の色の推量の情ゆるすに山ぢの風

藤原中納言定家

鏡の宮をとゝ杉の梢ゆしくもまさりぬ山ぢの風は

順徳院御製

山家の人を

雨ふる時ある山ぢの苔の色の深ぬ山ぢ

雜言の中に

一条院大臣

年月の数をつもりしかれる苔の山

松山

常盤井入道前太政大臣

世中はいとゞの松の文字ゆゑ

実盛大原日住ぶけるを詠ける野ちと山ぢみ

こゝろをとゝ中ゆ言葉ゆ詠ぶ

西行法師

山のこなたにすまひつかまつるのけちうこに世をこうる孤う行
此所*より人京の里こいまをトかはをそて
又ゆそをとゝみくにけうこすして

蓮如法師

引こつとすむみうつの信仰なこそ月をう中すす大乗の里
河内国教恵寺法師を法すむ所いにく
の孤うこ教うこ人のあつうまれけう人の迎
まをうみくつうりけう

阿一上人

ぬつこ山内のうことぬうつその里いあれみこうこ入上
鞍馬寺参つて通夜しぬうる夢河見こすう
うこ人くいうこけれい

御形宣旨

ぬすおり頃人とわうこ見こうこ西宮みすこ我いうこ
山里うこ夫引このをしときて

道命法師

見引の山田のこうこのをしをうみつうあわ社之をうの
前元百こう寄ちりけう付田家をうをはけう

ほう三位為

いかむとうこ桜の山田のこうこすうしへやこれいうこの世そ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うち山ふかきの庵の松さへ都のつとにかをりけり

伊豆國住

若葉はすゑの松にまじりてもみまがふまで

寒寞葉門人不到

大江宗秀

雨よりもなほ若葉の庭のすゑのしたもみぢ松風

前中納言山家

難言の中に

うしひめるたびねこほるそでにかけしかとおもひ

寒沼百里言に里行を

前大納言為氏

ゆうすゝの家のうちにかくれ山のかくれ行の月

慈鎮和尚の新しくあしたのうつり

つゆの後の世に思ひをくれ行のそのうつり

思ひつけて

惡道信觀

後の世を思ひ出るなれば

こゝろ行月の中に行を

後嵯峨院御製

はるの行世にこゝろ長のすゑ思ひいでぬ

春元百里言に月を

前関白左大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文を歌ゆくりなくとりあつめける

院御製

あさけみ雲のこなたなる山の玉水なれをとる山ゐを結ぶ

すゑ墨ぬくしみてすいぬくるのゐの社の世にたとこめ

後京極内大臣出家の後を野まこしりかけ

けるゆ大臣の結ぶまの社つとけるを表るまを

を隠るるうるを結けるをみくるのうるをら

書に書けるを結ける　法橋歌服

思ひけるこのみゆるを風にわかるるを社

前大僧正慈円常まをまりまを結ける

前右近大将頼朝

偽のしの笑しけるを世をわ社思ひ以と流るるや

歌くしを結けるこをこくをけ社あ中

みくこをるを風わしを関てやつるをける

西行法師

ちくをくるを花の歌きをとふるとを思ひるを社わ言の笑社

歌をきくつるくを言のをみ結けるを引を

法三位為家

わらおのゐゆく野への草をを引やまゐを乃末計高

歌しを

延政門院新大納言

人の妻にまちくさすお花風のなびくを見て

一条内大臣大将殿中納言殿に問ひ給ふを聞き給ひて

後二条院に問ひ給ふを聞き給ひて後撰集

みちのくにおいらの浦の玉くしげ

開かぬ

みどりの松も世々の宮の風吹つゝ

住よおもしろけれ付大納言三位殿を思ひ

て角へおつるけりつゝみていかゝ

後二条院御製

按大納言内經

ゆかけれいらくにけり

ゆかけれいらくにけり

ゆかけれいらくにけり

長こい天井とのを見て図りかりかへれば図りの子を見
法の歩み蓮花と花賓菊とかりかへ図りこ
い筆を出されくく年久くくをうをばべば
筆に石五三年の方丈の法皇へかりをかりこの
思ひ図りをこの勢ばけ

花山製

天のもとの年へくくの花山の一つの別の花をうへの
法皇法よりおりの中けるみ中夜まくく山遊は
けるの色氣をつの図りてはけの頃ちあさ

花いまるみのもとの中ばし何宮の花のもとへ
ししに四へちのきこしめるこそ
年ばつくの花山はけるの中ばの

入道前太政大臣

ちをの図りの天のこの宮のもとのうの花とるこの花をあ
都ちす

藤原為師

図りへこしのもと道のうの花山はるのけるの家の花ばの
後鳥羽院前兼の花山はくくの人くくのみのこの月を
けるの花山きの図りの図いをけるこの三の図りうま
図りへるこの花しの有けれい

前大納言為氏

六月ばかり花のもとに年ふりぬる人の情の身にあまりぬべき
東三條入道摂政の女にはべりしとき
一日もみまうしてをこたりなくはべりけれい

前右大将道信母

花のもとにまかりあうて後
一日宮ばらの中けの付侍後冷泉院考宮おりま
しけるまうしてあはれかなしきことをなげ
ひとり東門院内にまいりをのへつとめけるを
わすれて中納言殿のもとにまかりけれいかしこ
まりをなげ

二条院 後一条院皇女

上東門院 後朱雀皇后

花のもとにまかりあうてこのもしみまうしこいまてこの
中納言

花ちりてのちはいかにとなげくこころのそこまでも
ゆくすえのあはれはかりなくてのちのよはひは
あるかぎりなくこそはべりけれ

法性寺入道前関白家参内
花のもとにまかりあうてのちのこころ
大

二条院讃岐

ちりぬるのちのこころをいかにせんとなげくはかりなくて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉葉和歌集巻第十七

雜奇四

題しらず　伊勢

ひさしき野の草葉をわけいくせをへてあるかなきかに
世のなかをうらやましがるかりのみの

前大納言為氏

世中に求よやとれる月をみてやすみとはれぬ秋
題しらず　雅成親王

ちりはてし人の命をしらずして花ゆゑ花にかくれをぞ
花ゆゑかくれをぞ

又の日ふるさとの人のもとへ　道命法師

ふるさとのあれの野へのいとはしてあるをまつの花
東三條院かくれさせたまひける又の年の春
いとゆくりなくふるさとに人のもとへ
けり　紫式部

重ねてのあの男の書ける墨染の袖にあまりて
小式部内侍かくれて後ものみけり
和泉式部

わびぬれば今はあの男の書ける花とあるをみて

母の服はけるに雪にこりてはべりける
月日をすごしつゝ雪の降もかゝる人のう
ゑひくはけるゆきの川ぶねに

皇后宮大夫俊成

思ひやれ春の日ながら雪の山
岡融院つくれる山たてのあり人〳〵
けるに春雨を

前大納言忠

草も木もとゝのひにけるこゝろ
雅なる山ぬしの思ひよりけるなるべし
うのはなつゝけり

藤原忠光

雨のはれかくれる梅の花
高雲院かくれる枝の花にいとゝ
浮き梅をおりくけるに春宮中納言実忠

三条入道左大臣

いそがくうる世をよそに梅の花
四位殿の家をみくるまみはけり

中院内大臣

おのこゝろ花にまかせてあるを
はなをうの女御うまく後にて人多つゝ

[illegible]

清慎

九重と花のさかりをかぞへ我身引しはの春の雲

亀山院御製

いく秋をかぞへそめしか桜花ちるを命と思へども

近衛関白かくれて後こもりゐて年久しく

月ゆきけるを花に今よみゆきける中に

[illegible]

一位兼教

春たちわかぬ身とは思へど梅の花の香

善院殿[illegible]花みゆきける所にて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よりて後法性寺入道前関白のもとへ宇
つかはす　自々后宮大夫成
いたいたいたこゝろ思ひ侍りてなくなくなよ
中院女御のもとへ参て又の年四月一日法皇の許
おつかはすけり　謙徳公
付るさ年の春もとゝ宮のいたはりとゝの初参
後一条院四月より御かくれ給ひよりけれい
つゝみ給ふ中やゝ又もあつまりぬへき月こゝろ初参
四年の夏中宮又うせ給ひよりけれい後法性
　　按大納言忠家（カイ）
さてゝゝゝ

月

前大納言經房

雲影をみて月のいりしをいくの間の遊びわ
元暦元年世中さはがしくおぼえし年行盛
伯前の名をうしなひて兎の浦に中所身体
けうに八月十五夜月くもるこゝろ一年ハ
經正忠度朝臣ともに思ひやれてうみう
ちうを表白しに思ひやれてうみう
けりとして　金性法師
到しつるのこゝろにやうを月をみく昔ハ面のまへうう
物　平行盛

ちうしたみ世の人波ゝに面影うつる月をうつ
月前三昔をいまを人くよみはんとする
村雨ゝ光ゝ月みれいくこの玉泉の春もけわを
信人ゝ九人ゝかゝ秋はまけゝ時に和るみく
ゝをはけゝ　後法大ゝ九人ゝ
山里の板ゝ別のゝ年ゝ人ゝ廉ゝ人ゝ文ゝもあり面ゝ高ゝ
ゝ人ゝ例ゝ月ゝ見ゝ　おり面ゝけゝ板ゝ月ゝ
はゝけゝ　迦陵性法製
世のゝ人ゝよりのゝこゝろゝ板ゝ指ゝ門ゝ月ゝ見ゝ法ゝ

後法義院失を行るけるに年世をうしろ
て九月書る　中野て宗三郎と
夏世代は後にてこうれしむこと一の降こいりるるのを
仁助は親とかるれて後よみはける
後の者くもりの者は村内西新しく新くわる神社
堀川周白服を法はけるに付つるける　前人僧と實伊
ワれさへう神い房けき義衣を見へおりるこちてきるうと思へい　本院法院
記しるす　覚服法師

きるくす義こうるこうくりのわの遠のしのなうと思へ
西院門院くれをを行くこ中九りの仏佛半
てて西の出るけるる又の日西のこつと北れは式
乾門院出更のもしへ中つるける
多いの人洞西門の意ちるるる所西て神四ると　法三位為信
出　武乾門院出更
洞のこいくもりて所西に入ほすこ月ちるこ墨塗の神
八月の法てるるるをくれくはけるの中年の
十月は稲彫服又いもうこ成わし図てつ

りけり

君に我恋のなぐさめの屏風に書けるを何者にかわりて神に捧げ
後朱雀院の御中宮に献ずるを御覧ありけり
御覧ありて
出羽弁

思ひ入れ思ひ入れしを思ひ知らずと思ひ
八重撫子の御うつりにて後雪のふるにつけて
天暦御製

あるべきよ思ひ知らずと雪ふるむかしを思ひ
大納言経信卿

後年の雪の後の後年の雪の後の後
後朝紙

あるべきよ世に恵方のうぐいすを父母の始めの
右を中将忠教方に遣はす後の今日廟に参り
て後朝紙
先尾入道前右大臣

後年の雪しきしきの中にもの思ふ

[illegible]

[illegible]

永福門院内侍

鳥羽山院の書きこれるもしりすてられぬる

[illegible]

[illegible]

女房撰子女

歌ども[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長月ばかりに女房の中へ申しける

正三位季経

ひとすじにたのめるかぜのなびくにはいとゞ思ひの[illegible]

世中うるさきまゝに月見ばやと思ひたちける

[illegible]三位親子

[illegible]

[illegible]

[illegible]

流れ出でゝ玉井をなすこゝの長者ゝ世ゝ
和泉のすゝき野の川の名を取りて昔の人ゝ名を
女郎嶽ゝ女郎ゝ
引ゝ
紀伊國之極楽寺
博通法師
いとやらるゝ
みやの思ふ
しゝ
源道海
八幡殿六条
百ゝ三の中ゝ
人の
為賢門院堀川
前ゝ
佛ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後京兼房卿

いにしへのあしの原けぶりの海とうるおふこゝろ
ひろの中までに世をうしなふくよめる

信之法後京豊子

をくれゝこゝろ人つよくしけどと世をこゝろ
ぬるゝ袖人くあくさ雨のへだてをきて

後一条院御歌

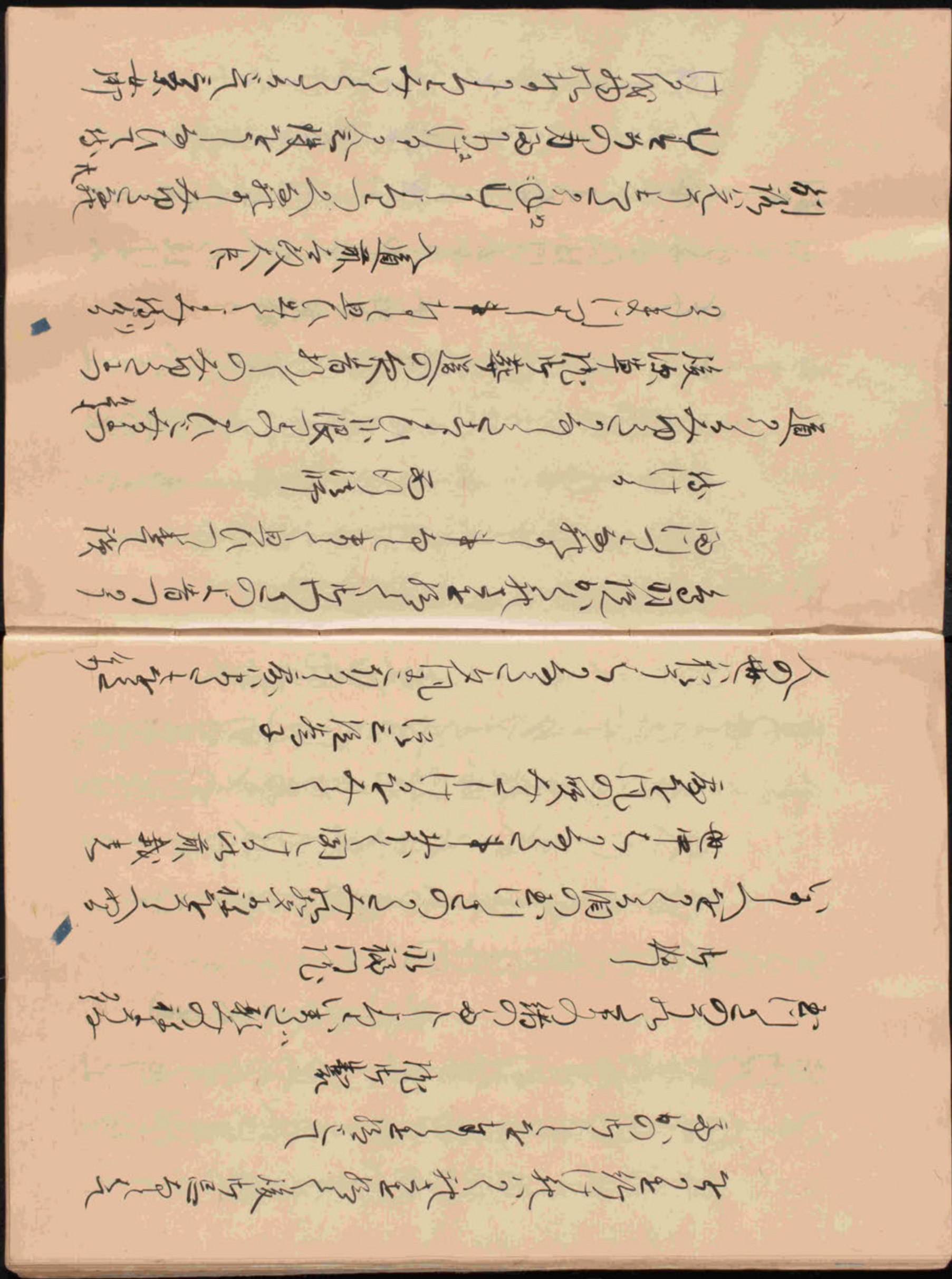
今日くる世をあつまりこゝろ
讃岐國にくらく秋をあはれ
後成るみをとして書をとれけり

宗法院中納言

三条院の御時にすゝらすてさゝあつまりて
なつかしけりをかく秋をあはれ後み出くき
さいの夏をもくくをつて四いくすてすと
吹ゐしはけるを見て

枇杷皇后宮中匠

筑紫乃は世ぬるゝ分秋のあつ見ゝ
あ月にさゝ中とのゝ後涼草院御
けり後日八永福門院へ中をはつるの



の時と変りてをかけるを見て

拾中納言家教母

別れ人をとどめてみちの小萩へくるのつゆをおもひやる
つゆにおかれける女房西の方へ後の月見に

中納言兼輔

をみて

さよふけてうつるとも見ぬ月の影をあはれ波のうへに
と東院の内らの花を見つゝ侍ける野への宣

女房のもとにまかりて侍ける者共ゆゑ中に皆人
今の宮けさ見つけてよみはべる

ありはら師

みちの花ゆゑ野にまかりて侍ける野へまうでゝ侍ける
八月ばかりに後源中将花宴へ参る
侍けるにいまだ花はさかりなるを
くゝりつけ侍る所にて月のいとあかきを
かゝる思ひやりなくおもひ侍ける

入道前太政大臣

源中の房にまかりてすゝ萩をのこすゝ萩
亀山殿にて秋さかりの夜
入道前太政大臣家の影をさゝげて言ふ
侍けるを主殿の人

[illegible]の[illegible]の書[illegible]
[illegible]の[illegible]人の方四[illegible]
[illegible]

前参議實村

源四位兼白前左大臣

[illegible]
後一条院白[illegible]
人の[illegible]

従二位隆博

[illegible]

武[illegible]門院内匠方四[illegible]後[illegible]の[illegible]人の後
[illegible]

章善門院左衛門佐

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

従五位利行

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

従二位[illegible]子

[illegible]

寛元二年秋三月の比亀山院御ものいみ
前右大将
紅葉をば踏わけがたき山路かな
指中納言後忠
にまうでて東へくだりけるに
皇太后宮大夫俊成
けふ来ぬる袖のしがらみ
白川院
いたづらに流す水の上なれば
法性寺入道前関白太政大臣
歌壇苑前摂政
まにまにつもるしの雪
従一位兼教
みつ雲の月ぞ世のうちひさめわ雪ぞいとゞふる
従三位為子
年へぬるとしさへ世にふる雪の雪ふる袖の涙
藤原門院
後嵯峨
世にふるさは水のつゝみかな
後堀川院民部卿典侍
世間音ものゝ哀はしらるゝ朝ぼらけの花と人の行

問うけて　　是武卿

清水月の明なるに　納言の家にわかうの世を奇特

枇杷殿の后宮　　北の忌の拾る月の

うち夜深くなる　　北将

やうやう月ごろいとやみにくるしみ給ひ

一条院失給ひ　　後世まおり給ひ所と

月のまに入給ひ　　上東門院

彩雲すでに西にうつりけり　　玉のうてなの後の

ゆうべ人の見しまに　　西の秋つけるる花も

七月を秋

咲ぬるすゑ　　花の

道命法師　　拾大納言家

橘の俊忠をみて　　深門

あやめ　　世に

前大納言為氏母の百ケ日　　仏経すうゆ

けう拾遺の結の会　　を橘の拾遺

つうすして　　千親世

いつ年ふる橘の花みくもあるうちの人をうら

後京極摂政　　為氏卿　　前中納言宗家

浮へてみくつりけり

従二位家隆

命にて思ひ出るこそ思へ者の爰に河の思ひのさらし付

二条院の御時又の年の夏月を題に

後鳥羽院

世中の常なきまを思ふくらるる

参河内侍

者の花咲くに義也物の月みるにつけをわるる世の中

遠者門院かくれさせたまひける物うへをたに

殷富門院大輔

けるに所の名ゆゑ義也の女郎花の

きるこかれるるをみく

中納言

所きゆるる世る物の女郎花しとしとわるを思

同年の十月六条大武重家女の思ひ出る

けるをみくに河りける

拾中納言親宗

みくすると同るる世れ爰ゆゑ思ひ出を知る思

為

六条大貳重家

限なる長き世の爰を知てくふ世るるとれとろ

れを

二条院かくれさせ給ひける中納言典侍

くれまくをしみ一人ながめけるとしつ

りけり　前九条内侍惟方

かくれゐて月の出さく待ぞ昔の版をたづねし

版

二条院中納言典侍

ながめつる月をこそ思ひ出てくれ行月をこそ思ひ

出ぬらめ　前中納言定家家母の思ひ出けるゆゑの歌

版

版をかたみのすゑにくらすかな　宜秋門院丹後

版

後鳥羽院の御代の版

後鳥羽院の御代に版をおかれける年の七月の十日

の夜の月　前内大臣

版

版をかたみのすゑにくらすかな　左衛門督実氏

版

後鳥羽院の御代に版をおかれける秋の夜の月

四十年の版をかたみにつゆ〻〻しくなりぬ

しけり　前中納言経親

源実朝の山荘に版をおかれける時の歌

父の君をしたひ奉りて和歌の道

にすぐれ給へりける人納言師

[illegible]

[illegible]

人麿の行宗

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法名くらつるみ殿御同くしみ法けう

前大納言忠良

きけこそ代々のゆうそくもあまてうこと
母の方四つけうを九月ちうと就者ちゝ三所
にをくつとをそうて又のりみ法けう

従一位伯子

九条殿御ゆいの書をもて人へちうこうのうへ
拾大納言忠良卿大納言兼信卿ゆすりを法名
をくしみ歌うけうを極へくうこうして

後一条院中宮宣旨

なへくまもあるわ別きの此ちさいうもゆもいと紙筋
枇杷皇后宮の内のうちゆ佛供ゝ花けうか
さうとゆをを教京保昌納言丹波ちうく法けう
るゆうこ花けうをとりて

和泉式部

教命ゝ和泉の家をうけてゝ玉のうこうをうへこと
宗法花ゆけうこ讃岐國ゆ法けうをか
くゝ花さを法けゆ花ゝ都ゆ四のくつうを後人
のうゝしてゆけうゆ法けうゆ問うけう

無法作

たゆたへる流れはやき瀬に舟さし出し袖の雫を思ひやるかな

同じ日はかけられける都なる母のもとにかりやすの図

て服きりとして別れ難の事思ひ出くるまゝ

かけける

儀同三司

うの花のさきそめぬれば夜やうやう明うすくなる頃

妻をとゝく鳴く後にしるべかな

中納言家持

元暦の世に事のことなるものを版図とせるひつぎ

小一条皇后宮三月廿日に崩御ありける日

年の七月五日の夜師又井の寺にて

法を授けける

別れ者のうきみの涙つもりつゝ袖を絞て

亀山院に参せられける年の版図

草院にて法勝寺に又参せられ

年の版図

参り遣はして

小一條院

参る三の版図義は源中納言家

中納言為兼

中納言

きさらぎの版図の版図

院御製

四月廿三日の九月日ことにまゐらせける

良勝法親王

中務卿宮尊親王かくれ給ひけるを聞て

前参議雅有

つゆけさの秋の野原の草むらに
前大納言為家卿月詠
ながめつるかな
ながめつるかな
ながめつるかな

年国にいりけるに　弁乳母

何日へる都にほのぬ橘の枝にく麻の明れはあるを見て

承久元年六月八日　藤原定家

春ちかくなりぬれはいとはるかにみやこのかたのうちの人々

年つもりけるに　前中納言山吹家

惜しつるとへはみやこの名残にいのちの長さ

玉葉和歌集巻第十八

雜奇五

紀伊国にまかりけるに所にしたがひて

みかけるに　人麿

後みこえのもとにかりのこれりけるを見て

歌舞伎に詞花集をとりて

はなをれはこれ指中納言後也言をつかはして

よみてつかはせる　皇太后宮大夫俊成

去年に行てとりつるさくらをもちて時

九条大夫歌舞

家の風次第に衰へ行くこのもしにわたり給ふ
伊勢大神宮一回の道中あへなき事
なりけりとぞ仰られい

赤染衛門

八重葎しげれる道とみしかども
訪ふ人の絶えぬるかな

法京院後

こゝに人を
みるもひとの名のみなれども
離別の中ぞ
今はかなしけいつまでかはる月ゆるの附

乳母門院

遊義門院

うれしの中うる世の中のなくさめ者のさくらの花の
面影を入道前太政大臣

中にはなほひぬけてそ夜ふる月ごとにまつ人の

西行法師

月のみぞ先みる者にかはらぬ月みる時は引ぬる
面影法師すゝめ給ける百首歌の中に楊貴

妃を

捨中納言

思ひつゝ玉ぬきてあるこゝ昔の姿の契をきく

上陽人を

法三位宣子

くもりなきあきの月をみてよめる　前大納言為家

遊女を　寂蓮法師

いつくかくれもなくやわたのつきかげ

六帖の題をよみはべりしの歌

前大納言為家

返り咲人のこころをわすれずは

大納言まはけ月家ゆきの三位

さはけりよ大納言三位を送りて

みくさ考数てもよみくりけり

入道前右大臣

和歌の浦をよめる　前右兵衛督為教

つの国の浦にあるこの海ふかくなる

新後撰集よりえらばれ　藤原為子

月はくもりなくはれ　前内大臣

月のうちのあをとなるあきくさ

前内大臣

みくさ社とよりて月をいとなむ

中臣祐氏

はつ集よりえらばれ

[illegible]

冨小路殿北にまゐりけるに和泉の草子を
[illegible]入るを人のこゝろ出くゝけるに
つゝみかくしうちよみて紅のうすやう
に書くゝ筆の中ちかくあるを[illegible]
[illegible]の始めすることをもしらで
[illegible]浦を漕ぎ
[illegible]
人をみに[illegible]すれば[illegible]の入江のたゝに牧[illegible]
[illegible]

前大納言為氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

道法法師世代の系図くわつ
前人納言為氏
四世代うしくさきけ父更に男の川上為氏と思ひ上
ゆく
道法法師
こい和すいうしくうる世の思ひ出る男ひこたるやうに
老後納衣世をのの和男の系てつ
是尼入道前摂政太政大臣
うるうるすれ八すれ世中を思ひまけるを思ひ
前参議實付出家しけるを同くやつ
りけり
入道前太政大臣

為氏卿を思ひすれ八中をけ和ご人のうめ八世和繼和
後嵯峨院出家しおつうを和けを付出家し
ゆうそよみゆうう　和氣性成納衣
うしく世しうしむ光の法ふ八ふすて和りうるこきけよ
家恵法師世をのの和ゆまけを付つうり
中務卿宮親王
拾ううの沼四く弱うう筆うう八氣ひうるう
ゆう
家恵法師
すけうう世ううみうをいう筆うをく和をうのや
世中あうるうう思ひ中けるゆ世ゆ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しの御法をうけくるるとも男女貴賤
皆みな人の世代のおくれをけうをみく
辨乳母
爰にうちよみ面家のうちにねんぶつ世をうちすてまた
建保の比月乃あうとけう和道助法親王に
あいく良久しく修法のまゝとしてあり
あたつうゝ法名
常楽寺入道前太政大臣
いつゝ人のあるこゝ岩さしも我名三死そ
入道二品親王道助
ふしぬ
ふしぬ告うとよ成やうとも三死ぬいさ世のまゝ

述懐のこゝを
二品法親王道助
うゝ方さへ世たゝさへて年とへはあつまの奥にあれこと
参議雅経
あつとうくるゝこと世中をいとふ山の里いさ
光明峯寺入道前摂政太政大臣
いさゝの月をこそ
いさゝの月をこそ
ちゝるゝ世のうゝ
ぬゝ人の方のけ
年月を過つゝ
こゝ
後の世
ゝ
ゝ
ゝ

人寿百歳七十稀一分衰老一分癡中心
二十餘年事幾多歓楽幾多悲哀の
人をとゝ失ふ

慶政上人

いとけなくして父母にはなれまいらせて
恋しきまゝ
うきをつゝむ月代はいつかすてゝ世をいとふ
この月をみく

前内宰相貞長卿

ちゝはゝの月みるとしいかゝとうしろめたく
ゆくすゑ思ひ
ゆくすゑ思ひ

法印親覚

ちりゝにちりをすみうくやすまの浦の
月をとゝみるけふ

讃人しらず

ちゝはゝの恋をうしろめたみ月と
ちゝはゝの恋をうしろめたみ月と

法印尊覚

ゆく末をいかゝとゝ思ひつゝ世をゆくりなき
宮月速懐こいふしを

西行法師

世中のうきをもとゝ月の光我身の
方をあらはつゝ苦をとゝ思ひ河や海みちゝ池の月

山里は月をうつす思ひかけぬ月の光を
みく

ほう二位雅平女

世のうちに思ひいるさの山のくもをすみうつれる月かな
世にしらみくはけぬ月をみく

後徳大寺大臣

思ふまゝなる月をみて昔をしのぶ
寿永二年の秋月わるく東国の事を聞き
しるすなりとて都のおもひ人のもと
へやるみくはけぬ

建礼門院右京大夫

いにしへをいかゝしらしを思ひつゝもしの月を袖にうつす
哉しら

藤原俊成

世をすてゝ行くかたの方へ入わるしの峯の月哉
ふる郷に住ける人のけふこゝに
情の山にまよひ来て月ぬすむ
ちりさい西東の月のすゝもるゝ人とゝまれて山を
入わるこゝろをくつるはけぬ

小侍従

すむひとをうてゝ有明の月ぬすむ
月前述懐こゝろをみはけぬ

月のうつるをうれへわくすると雲もわく月のいろをかくさ[illegible]

前大僧正慈鎮

[illegible]世界[illegible]業の[illegible]をわくるこころの月のあるふ

[illegible]

吉田社よりけり百首の[illegible]

をくるとはいへども未のうつむく月うるみ[illegible]のしたのもの

山里[illegible]月のあるこよ後徳けり

女御徽子女

久しうれをうへをるおくしつよ月うつりもよ入るけりうる

月の時景しるる夜星ゆるへのつ[illegible]

ける

遍昭

[illegible]かくれやうにみて月氣のまちをこすと人うえ[illegible]

百首の中に

武蔵内親王

今して新をくるこ[illegible]夕へすも我ををくれ[illegible]の[illegible]月

為時法師

[illegible]て出[illegible]る世に月のすみて[illegible]れるさ[illegible]人のさまこ[illegible]

山里は住けるに[illegible]節もちと月を[illegible]

都をこ[illegible]住けれい

壱基法師

我をこふ人へこうあけれ[illegible]みて都の月はおもひいつ

人のもとへ琵琶を送つとて

雲

足利親王家人

この秋ばかりへだてきく思ひ出くるこの月は我と三位

後京極のをとゝ

つゝ夢にあはいかゝ水のいとすゝみちぬる

月のうしつゝをみくまみはけり

弁上人

世中のをくゝうつゝ

久安百首 崇徳院

百そゝ三のもちけるゆ中の月を

前参議教長

けゝやうあるゝ人いうかゝふく月を今はあ月四

月をみく

清少納言

月みれば光わゝ月こうゝ

ゝ月のいとゝ山のゝゝ

後法大ち大臣

ゝ月のゝゝ

ゝ山のゝゝ

前中納言定家

ゝ月のゝゝ

ゝ世を

ゝ月のゝゝ

ゝ世を

後法性寺入道前関白太政大臣

百そゝ三の中ゝ

宜秋門院丹後

いとゝゝ

ゝ所ゝ

ゝ家の命を

述懷の心を　　前大納言忠良

数奇てあるにもあらぬ身にしも世中に恋ぬるとは

藤原信実

春の川瀬の山吹の洞ふる神いわまを分て

鴨も月

あれいくとしか山を出て秋の月ひとりぞ澄てゆく

洞院摂政家百首の内

述懷

法二位家隆

あるがこしあれとも捨てまた世をうしと思ふ身をいとふ

述懷歌の中に　　中務卿宮親王

かつ為すいとはるる人もなき世をうしと世をのがれ住

山陰入る前九大臣

為元三年法皇の内にまゐりて百首歌の中に述懷

前内大臣

うしとうしとうしとしたしと思ふ身をいとはるるよりて世をそむく

同人を　　法皇御歌

志なてあるうらめしけるを知ずして世を歎く

よみ人しらず

あるがなる身なりとうひとやとらいとるるうしたおうしく世をのがれ

前参議為相女

手枕

述懐の心を　　平宣時朝臣

中務の宮の親王

雜

前参議為相

日吉社に詣で侍りける百首の中に

前大僧正慈鎮

述懐歌の中に　　法性寺

前参議為相

九月廿三日みはけるの中に和歌を

従三位為家

つの乃国の住吉にまうでくしてみて社にまうでたるを

述懐の心を

辰二位隆博

をとつ年の秋はいたくもの思ひをそへしあはれの色

續古今集に

つくれはなく後述懐の詠の中にみはけるを

前大納言為家

武蔵国にまかりくだりてやがてかの国にまかりつきて秋の夜

雖詠の中に

前大僧正花園

こゝにかくるる月の代々の和歌の道をおこしたる人の

九月の三十日の国にまかりつきて秋代にまかりあはれの

歌為相

嘉元百首の詠にまかりけるに松

九月中旬為教

住吉の松の思ひを言はんにまかりあはれの道

前中納言資宣

ちはやぶる神の世にまかりあはれの道

守覚法親王家

述懐の心を

三条入道九大臣

[illegible]

百首の中に　武蔵守親宣

うき山に歌くらし世の光てわる袖のうへに

[illegible]

[illegible]　西行法師

世中にうらさ[illegible]ける法師[illegible]

人まつりける　増基法師

[illegible]

[illegible]　本院侍従

世中を思ふ[illegible]思ふ[illegible]

[illegible]　[illegible]

いつたにもいつくにもいつる世中をうしをいとふ[illegible]

世中にうき身をなくてあり[illegible]思ふ人の命をとゝめまし

[illegible]　花山院御製

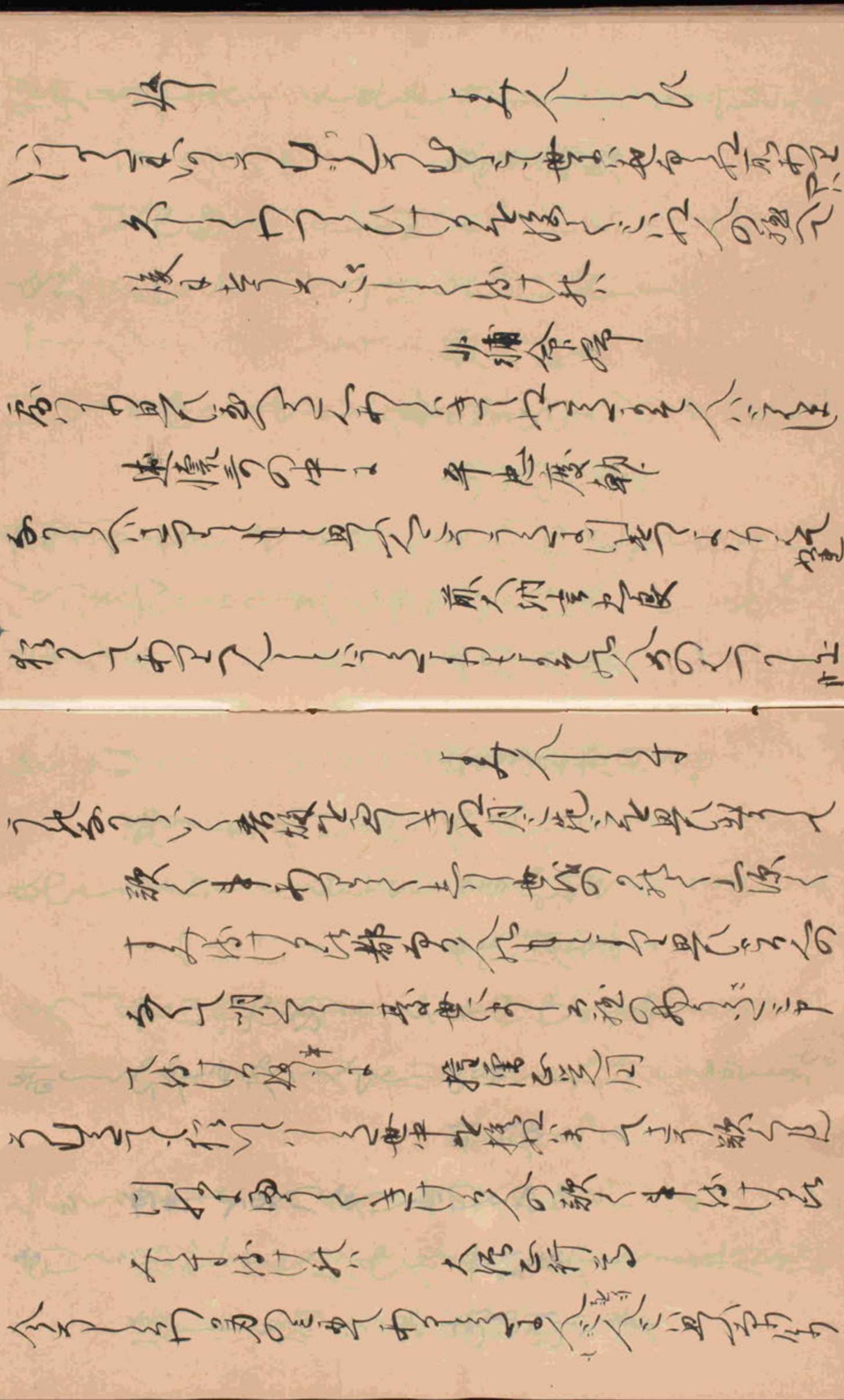
いつくにかわれはすまんとあくがれ[illegible]年月をつゝまはいつかへるべき

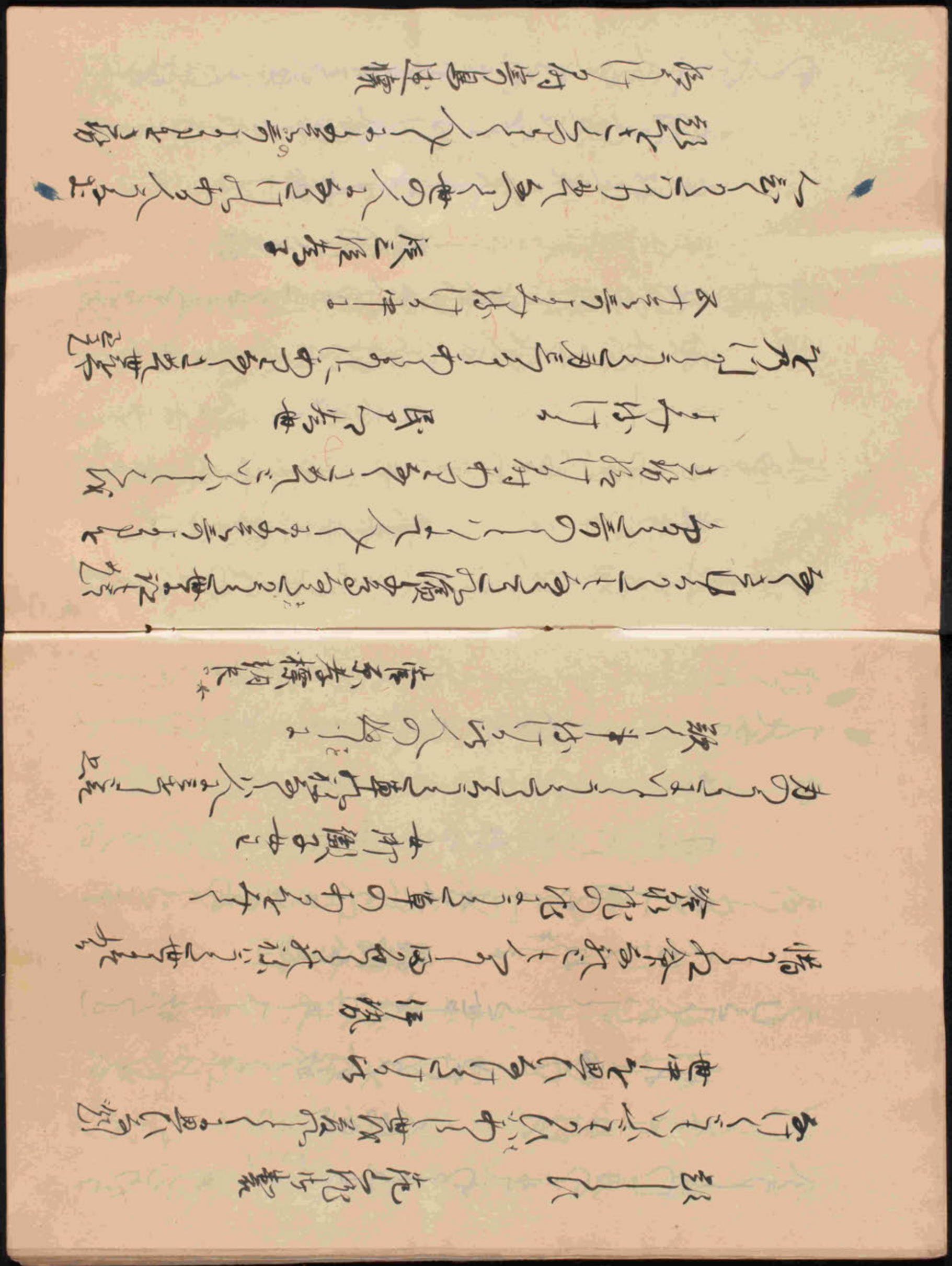
[illegible]　後拾遺

[illegible]

人の許に問つかはしける　藤原惟規

いつくにか[illegible]思ふ[illegible]





[illegible]

[illegible]

[illegible]

けるにはかに問うけける　侍中忠快

あはれなる人のつれなくなりにしかはかりをこそ思ひ知るなれ

前参議實時

かりにしなれはやすらへにけりこの身はいかなる世にかはてはなるらん

平親世

いかにせんあはれなるまきを歌にしてはてはなるとはなるとはてはなるとは

述懐　平泰時

思ひしらんよりはかりなみかうしらへもあるとはなるとはけるとは

前大僧正慈

すまはやとよそうとはいはれしのはかはしのおくの那

左中将具氏

うしろてはなをはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとは

前参議俊清

はかりなるとはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとは

難波三の中ろ　左門院小紫

昔よりはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとは

世の中に関してはかりの身のなるとはなるとはなるとは

権義門院

かりにしなるとはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとはなるとは

前関白左大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首の中に　前中納言定家

月のうへを世にすみこしとてもとまらぬ人の跡を

日吉社にまうけ百首の中に

前大僧正慈鎮

思ひかねいかにすごしし小わらしの世の捨れなるを

人ゝ見ぬ山のくれて年とへわたれば思ひ捨ぶ

[illegible]

前大納言為家

いつまでかつゆ見ぬ人をとゝまらぬ年ゝ

万葉集の百一句を部類して人ゝに言ふ時分

ことをけりて詞のうへにきゝ入ぬしを

新撰万葉

天はりの雲のかゝりきてゝ千世ゝ人の人のかゝしてゝ

難波の中に　摂津守親

打ゝ物ぬ付ゝ人ゝ物ゝ思ひ

仕事を思ひくゝみ物ゝ

拾中納言俊忠

春の花盛の紅葉をみ人ゝ

懐旧の心を　普光園入道前関白左大臣

いつゝ人を待ゝ人ゝ

後京極摂政

みて孫の昔をとゝまりて世に成りけり

小福門院

ゆくゝ月日をつゝみあまりてゆくすえを又もみてほ

二条院讃岐

思ひ出る昔はなくて成てゝまゐりてちりぬいたる花

前中納言定家卿

の露を九月九日の夕べ花ゆかりあるこゝろ

八月廿日定家つ

人々言ふとゝはけるゝ娘懐旧といふことを

前参議為相

ゆくすえあり娘のゆかりのこゝろつたなき世をとゝ神ゝ為を

離言こゝろ

前参議家親

為ゆくさきの世こそ思へこゝろ行こゝろ遠つゝ為

源義行

思ひつゝ世こゝろ世の世をこゝろ月ゆゝ行ゝ

星ゆ久しくゆけゝ日人々のこゝろ

小馬命婦

ゝゝゆけゝ

引ゝゝゝ

世をつくしもあへずけうの奏こう告の言こそ杉とう屋敷
門墓為法けうる柿本内侍より問うく
みはけう　　宗蓮法師
古うこ法と海のしほ問ゆく船ぬうこのしほをみる
初風へ問ってけうしいづてを立ちをみく後
はけう　　法三位為
うこうのうちの名ばこそあつうの昔の法をみる河
那須は春つうくうくもなへうの人みるへしやつを
しく又出はけうをくつをよ問うくきてはは
けう人のこもりるうくはなりはけう

大法ありる
紀伊国ゆうしに半瓦のこをうてくけう
ゆのあうこうよ到くはけうる書付けう
ゆ弁上人
日光こううく後を無乙人なくこうくこうくこうくこの
後法華院出付又節をて宮廟より国使へ
還御ありく後をみはけう
弁内侍
重ありくあつしを居の立てはうこを無人へ人

懷旧の人を

藤原秀茂 法名

ちりぬるを一夜のうちみるゆめ昔ながらの
はるの春風

いかなれてつもる昔を思へとも
はるのうつりかはるこの世に

人江夏重

今更につくねあしたるつもる昔や今
はる三位廣茂

人もわすれすぬ思ふいとしの思ひ出をそ
ふ

前大僧正慈鎮

昔思ふ清水の流れの底のつもれるはのあかるとは

懷旧の人を

藤原俊成卿

あはけわる昔の人の袖ぬれ我もおとらぬ
惜しへくるかなつもる世中をすぎて又こそ

月日のかをを

玉葉和歌集巻第十九

釋教歌

いきの海の清きなぎさにあそぶ鳥
是も善光寺如来の化身なり

たぐひなき法の山の奥の院
はるかに清水の社よりして百万反の
念仏をかけたる又ことにあひさろ人あり
安しく三人具足して念仏をつとめ
ぬるとかけたる社にて和歌三人よりて
いとうまにやとおもひて社よりかけたる歌

三月三日

谷川の末の流れに社の堰
これにあひさろ人同じ社にて念仏の数反
いたりくるこうすく社の堰にて人かけ
又志賀に詣でこうしけつ人の社にて人
かけ社に詣社の御ようなる歌ありける
くもりなく澄みたる月の社
除夜社に人百度の月の社中にてあるこうゆを
これに真如堂の鐘の響く起世の悲歌の夢
ものこそまを思ひ社の我身の業障をもと

しをおうれ思ひくゆしつて法けう経
けうをよみ奉りけるとなり
極楽へ引まゐらせ給へと思ひ入て
ものゝ信心なれば南無阿弥陀仏と
彼つゝ申けるへ念仏往生のまを
いつゝ之日の暮るに成れば
これい庵室の法華清水もに通夜し
給ひけるなりけるとも
花衣うるはしきつゝ
はいの壹意は師いまゝ出家し給ふ
けり府彼河の親鸞に四ゝ歳にして
やうくこゝろ法けうの所まくの出家
しいてくの佛法授りて往生をこけ
つゝ之れ彼と上けるよ内陣ゝ
れけるとも
人のよりこの人のまこれ
はいの印の別当なりける信不調なり
あつゝは法にすまれ
へく後鳥羽野よ四ゝ
けり府印おうみく用をゝ

神をわすれて五つ[illegible]のあるれのこりし思
いとみくはけり此[illegible]こそ[illegible]よみ[illegible]
こゝ

[illegible]川人[illegible]といきてこゝ[illegible]
此言い後京付重上紙[illegible]
はけり付法花經一万部をよりをはけり後
の[illegible]地藏菩薩のみて演を[illegible]
はとみるいしれ山の草木よい行精善抜花う咲つ
此言い夫人のわ[illegible]
門をはけり[illegible]

行基菩薩

山島のあくを図て　行基菩薩
山島[illegible]こゝ[illegible]
[illegible]　[illegible]善陸

有ゆの世[illegible]
戒陸傳固持不[illegible]肯こゝ[illegible]

慶政上人

かくてもあるかなるあるあの世と接[illegible]
惜一すく[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法けう

世をてらしにつたへよとつかはしける　　屋入道前右大臣

保延二年詠歌をすすめ給ける　　藤原為忠朝臣

けふのみぞ法花経序品の心を

引てつたへる　　民部卿頼

同品を演説給ふ　　久我内大臣

法のことばの山深き岡しの名をつたへ思へ

法のことばの山の若草しげくまじりぬ花を尋ん

佛は涅槃度如薪盡火滅の心を

法性寺入道前関白太政大臣

人しれずほとけのひとをおもひ出るこころ法花経の

方便品若人散乱心乃至以一華供養於畫

像漸見三数佛　　法京頼業

引ゆくことをおもひてゆくこころ花ちるこころ法花経

みすほの心を　　従大納言切成

世中をいとひて国々佛をいとなむ引ゆくこころ

前大納言為氏卿

ゆくへ一品経の三ツ山みねにたつ雲を冷泉

平宣時朝臣

小車のはるかにとをかすみ世をめぐる法の師

釋教の人々

真淨上人

おなじくみちを人々に教へ給ふの法門の一ぞく

信解品用流諸國五十餘年の人々

義天親感

長うして三乘さうとけうるなかにわれ今ぞ疑網

藥草喩品の人々をよろこばしめたまふ

宗通院作製

さはのくさきの草木の性のわかちを引給へるこゝろ

授記品の人々

性成佛入道前授記大比

ゆゑにこゝろを佛のたまはせしかばこれをうけ

法師品

印品の人々

よろこびの人々

約束をきくこゝろ

此のうちにあり

廿八品の中に五百弟子品をよめる

平經品納比

衣のたまのたとへをとけるこゝろ

五百弟子受記品

五百弟子品

法師品

如來壽量

たいのうちにこゝろ

衣のたまのたとへをとけるこゝろ

本染寺門

後成佛十二年佛壽中間言宗家一

品經供養

法師品

行人記品の人々をよみくつ

寺堂井入道前家大比

[illegible]

[illegible]

中務少輔源承

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前指少将都源信

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前参議康経

[illegible]

殿富門院大輔

[illegible]

指中納言藤方

[illegible]

徳賢門院中納言

[illegible]

三ツ子ヲ授ケ給フ。拘婆羅ハ揉薪及巣窟随時
恭敬ス　白
自ら后妃大夫後成
新ラシク学ル者ノ三ヲ生ムトシテ之ヲ見ル法師
法師ハ又ハ未滅度ノ後若有人聞妙法蓮花
経乃至一偈一句一念随喜ス我亦与授阿耨
多羅三藐三菩提ノ人ヲ
薬授法師実能　聽ク
偈ヲ説キ言ハク未ノ来後ノ世ノ善男子ヲ
勧持品ヲ説キ給ケル
宗徳法師製

人間ハ万ノ光ヲ面ニ向テ西ニ向ヒ給ヒ
安楽行品ヲ
人命ハ万ノ宗
世ニ生レ難キ人ニ生レ難キ法ニ逢ヒ難キ
寿量品ハ一人欲見仏不自惜身命
勝命法師
かとうの万ノ世ノ為ニ命ヲ惜シ給ハ
月品ハ仏ヲ
宗法法師製
月氏ノ人ハ万ノ為ニ命ヲ捨ル
薬人納言ノ

出ずるに人みな[illegible]

不軽品　　薬王品

[illegible]

薬王品廣宣流布　　前人僧正慈鎮

法華経の[illegible]

[illegible]

法華経の[illegible]　　前大僧正[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

諸仏出世不為令衆生入涅槃但為度示

生死二見耳　　之後朝夕

[illegible]

云是義経四十餘年未顕真実の[illegible]

[illegible]　　法華獻花

[illegible]

維摩経の[illegible]　　小弁

[illegible]

心経の[illegible]　　授律師隆寛

[illegible]

人王四十五代聖武天皇所得之寶之屋之事

僧正玄朝

僧正玄朝ともけうかの門のつけさせ給しに猶の人をそ

無量寿経厳浄国土皆悉観見

源親長納言

時ろ東国の国の国のもとくよきてろことをのこしてそ

天竺の中日本国を　後京極摂政前太政大臣

くろうしていさるうくれつてゆくすゆる月に

人数ろうしみかけける中に十東の人を

ほろこ仏ゐる

うをりふるこ仏の法のさ問くしもの人ちをまを仏

聖武天皇の人を　後京資隆朝臣

車のいかぬ者きてゆくやへ人ろうちを花ゆやとつる勇を

世の中しゆゆ引てくろうちゆ

往生仏ゐる

増進仏道樂　前参議教長

法とみるゆろうをもろうてこゆるすむ心ゆ

源季廣

ゆろうへく法ろこゆを入るけるうる世の中をいそそ

不邪婬戒を　前人納言忠雅

女郎花の志めゆひ一本の下ゝ人ゝ門さらぬ先

為兼すゝめ侍り一品経の言葉中ゝ人経の会を

入道前太政大臣

ちるゝよ云ゝとくはなを〳〵ゆゑ今ゝ言葉の花ゝ云ゝ

釋教の心を

後京極摂政前太政大臣

納るゝ雪のミ山にゆく島の五つゝ井ゝ人のゝゝ

永福門院

ゝゝゝゝに人の宿ゝ月ゝゝゝゝ

前人信正源恵

ゝゝすゝゝ義空のゝゝゝ寿信つゝゝゝゝゝゝゝ

前人信正道孝

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

拾信正光国

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

信相宗八三国信寿しして相原いたゝゝゝゝ

無福ちゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

前人信正良信

三門の国ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

物数言の中ゝ

前人納言為家

道ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

前大僧正道玄

いつもとせ十のさつひとたりいのちてしもの事をうけ
流来生死のことを　よみ人しらず

草枕ゆかりとうめに問ひしひ出さく表いくよめひ出
久無百ろ言る物者の人を

結賢門院堀川

あさ川ゆうこ恋をとうこ
月よりもくれ恋をおもふこいまを人の後
とはけるる　法橋顕昭

やとゆゆくかこ月よりしけ恋あるはいくくおつ

常行堂の引声の念佛を聴聞して

前大僧正忠源

後鳥羽院出家の時戒師を勤て侍るに

又後鳥羽院出家の時戒師を勤て侍るに

よもすがらあに人の心をとう事は
なかく人間のをとう事は

二条院讃岐

あさけるる同じやう
なを恋て思つ事をう

中務卿宮親王家百ろ言る

前伊勢守實房

あさけるる引つとの出代るあ事をとの人のむをとうみる所

井ろうとて人をかたるあうけるを恋ろうとの表い歌

詩一十

同元上人

ちぐさに行つる道のさとへ元月ちりぬるあの山ぶし

和歌のこと　　行戒法師

何しかは法をさとりの海原に月の人の月をつるらむ

入道二品親王尭性

さのつとあるつるさ海乃くるるまものつとさとりの人は迷いさ行

入道前右大臣

尋入みちのくにきけこしの門引をわけあの人の事を実

梵網経序奥に元亨後設疲宮後代深悔　　尭改上人

あすしらぬ命の月りをさとりに更ひてしらぬ法師

形照法師すゝめけるゆ和歌三の中に雜本

自度出離度他のこと

感阿法師

山ぶしの苔の上ふしるる孔雀人をもつて苔の陰

百ぢ出三の中に　　後鳥羽院御製

さるゝや佛の乞ゆ和歌ゆ和歌ゆ和歌ゆ和歌ゆ和歌

雅成親王

為煩悩賊　　蓮生法師

浦はすむものの死をうけつるみのけう是は法
　　　

於蓮花八葉上各有如来

慶政上人

法の水流るゝこゝろをあらはして生死の蓮の花うるはしく
唯識論の中に如海波風縁起作波浪以
いとゝを

拾少僧都那波

吹風と波のうちのいきをゝ生死水とゝのゆるやかなる
化作国土のうちのいきをゝまるゝ所
三界唯心の仏法を所のうちに衆生を悪の
思いをすゝめ[illegible]のうちこゝろ以来思い出るなく
濁世のわれら馬ちとおつて阿陀頼耶の地に

ひいをいるゝ花ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ礼拝するゝ夫
生死輝迦人師四位の灯燈佛ゝゝゝゝゝゝゝゝ
泥ようゝ我ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あるひとの法のことばにたがはぬこそ
よ年經のこゝを　法印運秀

かゝる樹と又もの、たゝ物言わぬ我が方のあるとすれば
佛性義しらけるかの寺師　み寺校ようこそ
ゆりはけり　法性寺入道前関白太政大臣

をしなべてこゝろ法をきゝてこの花の色に
物表仏言の中より　院御製

こゝろはのまことひとつのこゝろにてよくこそ
般若心經の半意をこゝの心を　前大納言為兼

ひとつこゝろをきいめをこゝろとしてこゝろ
二月十五日涅槃の心をよみ侍りける　院御製

ふかいこゝろ花のこゝろの夕嵐きえし煙の名ぞとゝめし
佛の涅槃を思ひ出でゝよめる　ほう三位春光

いかなる人の者なりしを思ひ出でゝよくもこゝろ和歌の月
舎利講の心を　参議二位家隆

けふこゝろこのこゝろ之ゝ表れる者の煙より清し秋の月
天法文を法談する時に付て月をゆゝて後秋の

かみを国のみよとあらん

高弁上人

はるのあさぎりうつるあとのはつかぜを
さまたゝぬるのゝ鶯

玉葉和歌集巻第二十

神祇哥

あるとしのゝ七月のこゝの日はゝ林垣中列の縄のうちにはゝ
はるかいはゝあり師々林宮の四のくらうたに
あるゝこの秋まくのうちに法施奉て年
地はへるとあるくあるまへあるとあるまへ
ちゝくあるくあるまを思ひつゝをゆくすに
四つゝをけるゝ所をさせたりけるとも
けゝくこゝ思ひこゝをゝ引けりけりたのうちこゝのうち
はるかいはゝ春日社の廻廊四くゝを仏けり神殿

秋の月をさそひけるとも

いとゝ秋をこゝろのね[illegible]の池水まさる四人のそゝ[illegible]やい

[illegible]ひける人はの[illegible]この上ぞ義つよ後世と

まれ[illegible]けるにはかに[illegible]ぞこのうれの

池水よりも人を又けうとう思ひつゝ

まとろはけるあるよに[illegible]をさとをはなれ[illegible]

[illegible]

十日あまり[illegible]いよの[illegible]

[illegible]の[illegible]賀茂社の[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]

いよの國うしの郡の[illegible]とゝ[illegible]社[illegible]世をすゝ[illegible]

[illegible]の社へ[illegible]男の[illegible]

[illegible]食し[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の國や出つの郡[illegible]

[illegible]ひける人のなのこゝろやう

[illegible]ひける[illegible]

[illegible]歌[illegible]

[illegible]書を書くをこゝろみる

をこなひけるに年月つもりて七歳すぎて又をこ
なひけるに所詮宣わたしけるとも
日吉神ゆゑに所詮なし般若経のつよのわし限
此三ヶ月貞慶上人般若経をいとなみ所
春日大明神を勧請したてまつりて思ひ給へ
ましますに佛の御名成ぬれば人ともうの候
元亨治元年の春の比新熊野の中山の元
をこなひけるに或人
筆を引てしめ向たまひけるに
をこなひ念佛を申人の給へりけるを
えらびうつし給へ
日吉の御願なるの此三ヶ所
ちかゆるものいるを給へ
此三ヶ月春日大明神ゆゑ
けるとも
あもしむちうしの人のまいりあはせ
此三ヶ月人賀屋人明神ゆゑ
日吉神ゆゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てはなれるものとおもひて花を捨
現の中前より遍照僧正の
ことをいふものすなわち
しく思ひくをこころうとやこれなるおもひ
けるよ又寛前よりもとこれなりつることもの
しくくのこりてはりて世をたのもしかり
ごとし

橘花ちりぬる後のつゆみよりはかなきものは
なれい秋四人明秋の中ごとし皆枝折の宮
四尾張氏ぬきてきこえけるを尾張負

職の女の名を松ごとはけるの後京季兼上ごと
しくかくかくの季範をうめとけるを後明秋かく
詠宣ちを野はけるよりちくく枝季範に
めくく大宮四ちかくまを未人をよめすし
ごとし

風をやを波のさくるをつるちてをの春ぬてやをごとし
をいは野の中ごとを
彩者をよもしの橘花をのうつ人をく人の方七ちの人ごとし
をいは祇園の中ごとのをくく人ぬ春をみけるごとし
秋祇ごの中上
後京極摂政前太政大臣

我国に而まてら秋のまつ（末）ゑ
伊勢遷宮の年よみはけるに
鎌倉右大臣

秋風や初りの文の三ヤ川
承元二年鴨社に人々歌合
後鳥羽院御製

三川つゝ三ヤの世のりゝ歌
龍山院すゝの江はに幸して人々に
歌詠ませける
入道前太政大臣

つゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋のまゝ
為家卿

くもりなくいはもとの鏡こゝにかゝれる
秋祇の心を
祝部成長

秋毋のゝ三川ふるの宮所に
天台座主慈円
良助法親王

告ちる秋の秋のちりすゝ
日吉社興感神託
けるに後鳥羽
前大僧正忠源

秋よいとゝ都の月は極めゝ

貴布禰社にまいりてよみはべる　　増基法師

うきものゝ川のに落ちゝ秋ゝ水ゝ人ゝ恨ゝ方ゝ多ゝ如ゝ見

熊野に参りて歌ども前のもとにて後はべる

人こゝろうつりにたりと秋ゝ風ゝ吹ゝ

秋萩の人を　　大僧正行尊

いにしへの松に契りを結ばしを百代経ぬる後の世の人

年久しくおもひわたりて後に生れ年又周日にあ

ひて後に生れ年又周日にあ　　普光園入道前関白太政

菊花　春日の野べの草の葉も秋のもみぢ又さこそ

春日社に詠まれしよみはべる

おもしろ秋ぞあはれ秋ぞ色々に千代を経ぬる

陰ぞ賀茂社に参りてよみはべる　　前大納言為兼

人の心をくつがへしてよみはべる　　前大納言忠良

賀茂の宮の社に参りて後拾遺の作者宮内卿

ありけるこの年宮の使にてよみはべる

ぬまのあやめ　　前中納言隆良

秋はなほ思ひ捨てがたき草の葉に言ひしかの人の跡を

四月八日杉尾参詣する時に内侍殿

ふるさと郷の名ばかりはかけてもなほ分るの明家

秋

後源中納言内侍

引きつれて志賀の浦なる白波の名のみ立ちぬ我ぞ悲しき

秋祇園の中に暑日を

常盤井入道前太政大臣

くもりなく月澄まし池に水をこめて松むしみるこの山のもの

三笠山雲にかくれて松ばらに月ぞ出でぬる山の端

九条九大臣

題

清水寺の秋の末の月

後源中納言内侍

慶治二年十三首合

八幡山月の光に紅葉して

後久我前太政大臣

百首歌の中に

前中納言山家

月のうち秋の山路の紅葉ばの

月のうち秋の山路の紅葉ばの

月のうち秋の山路の紅葉ばの

源頼朝卿八幡へ参詣ありし時、
うち中あつく歩前へ八月いてゝ山まぶしセ
給けるつゝみ鼓の給けるを聞給
つゝて後上のうみかけるを見給
給孫なくゆゝしき神よけれかの信ぜしへよつこい
事しりなきて
平忠盛朝臣
神ごと中くゝ氣はいり水神うちとゝ男まうつハ
日吉社よりけるを百そう三の中ゝ
前大納言忠盛
四しゝ社ゝ佛のゝしゝ
ゝ給へ給をゝ中ゝいなゝ四へ以

四社ゝ四ゝくゝゝみ給ける
前大納言忠良
神祇の事ゝ
法下賜舞
あのゝゝ給ゝ四ゝ中ゝ
男上ゝ家ゝゝゝゝゝ七月新宮ゝ人ゝ人ゝゝゝ
前大納言忠隆卿祭の使ゝゝ給けゝ付ゝ
けゝゝけゝ
ゝみ人ゝゝゝ
いゝゝゝゝ家流ゝゝ
元ゝ三年中讓位ゝゝ中ゝ内給所ゝ行事
給けゝゝ後給ゝゝ
後源華院内給

[illegible]

[illegible]

拾大納言為基

みちのくにまかりくだりし時、あぶくまの野にて

小弁

あぶくまの山のもみぢ三笠山のもみぢにまさりけるかな

後法性寺入道前関白右大臣にぶけ家にて

三月尽をはりなりけるよ　皇后宮大夫俊成

ちるとてみよとやをしきの花なれば今日をはるべきかぜ

[illegible]

中院右兵衛督

春日山秋のもくみぢ山のもみぢてさうふかぬ家もなし

大中臣春方

三笠山秋はすぐしてしかぬ思ふこそうつる身なれば

建久七年十月春日の社に行幸ありけるに射場

留めにさうぶして還御ありけるに有明の左時

月くもりなきまちの左衛門陣よりいとをかしきの

ありさまを見て詠しける　藤原定家朝臣

春日山ちとせのみゆきのつもりにし有明の月の

後白河院法皇八十賀の使ありけるに位をまち

て詠ぜられける　従二位朝子

すべてこの世のみなかく秋よりはかなく侘しの松をみるにつけて、
後源中納言灌頂堂をたてゝ法華堂とぞ名付けるとぞ
のみの水をうしなはりしかくて六条の女の院
仏井戸源氏の御のみ水をみ給ひける

前大僧正行

元清水の流れ源氏殿つくりもてなしやうなつかしき
紫野に幸ゆき二度の御行前まで参りめ
けりをさとはかりけるる

後白川院御製

ちるもくやしい都をつくりいでゝ久しくみくにの月
ちの〳〵かしこまりて詔宣をうけ給はりける
ちくもいつこもいとなれたるをもてなすくもりみくにの月
郎〳〵

法皇御庭守

みくにの南の山の滝川流るゝこゝろはまことわすれ給ふ
十月ちかくなる頃ほひ嵯峨のあたりに
堀川法師

海川(みかわ)のあまりの物哀をなのめにおもひけるる
そのこゝろをいかにかいはんとすれども
のゝ秋の後の頃ほひ社に参りてとゝ年しのく
ゆくに国のつゝしみ侍りしけるつゝ又の人に国にて

しもやらくに安三年十月十日奥州へ繫、
四いりもそらくを見るかの社へもみくしに
法敎寺けるを拾本の河の月なのくるを岩ちを
と社をもあくに社を見て仏けれハ

あり法師

かしこ河るを見て月河のうほかへいりて見へあれる
日吉社をミやるを言ちけるを中る

法橋春誓

うりをを法のをを四ちをにやる社を社きけ
後法性寺入道前関白家百を言る赤袴の人を

身分卑天大史俊成

賀茂社をみくちけるを百を言の中る

前人納言忠良

きりをを社へものをいへうるを男を社を
熊野新宮をくをみける

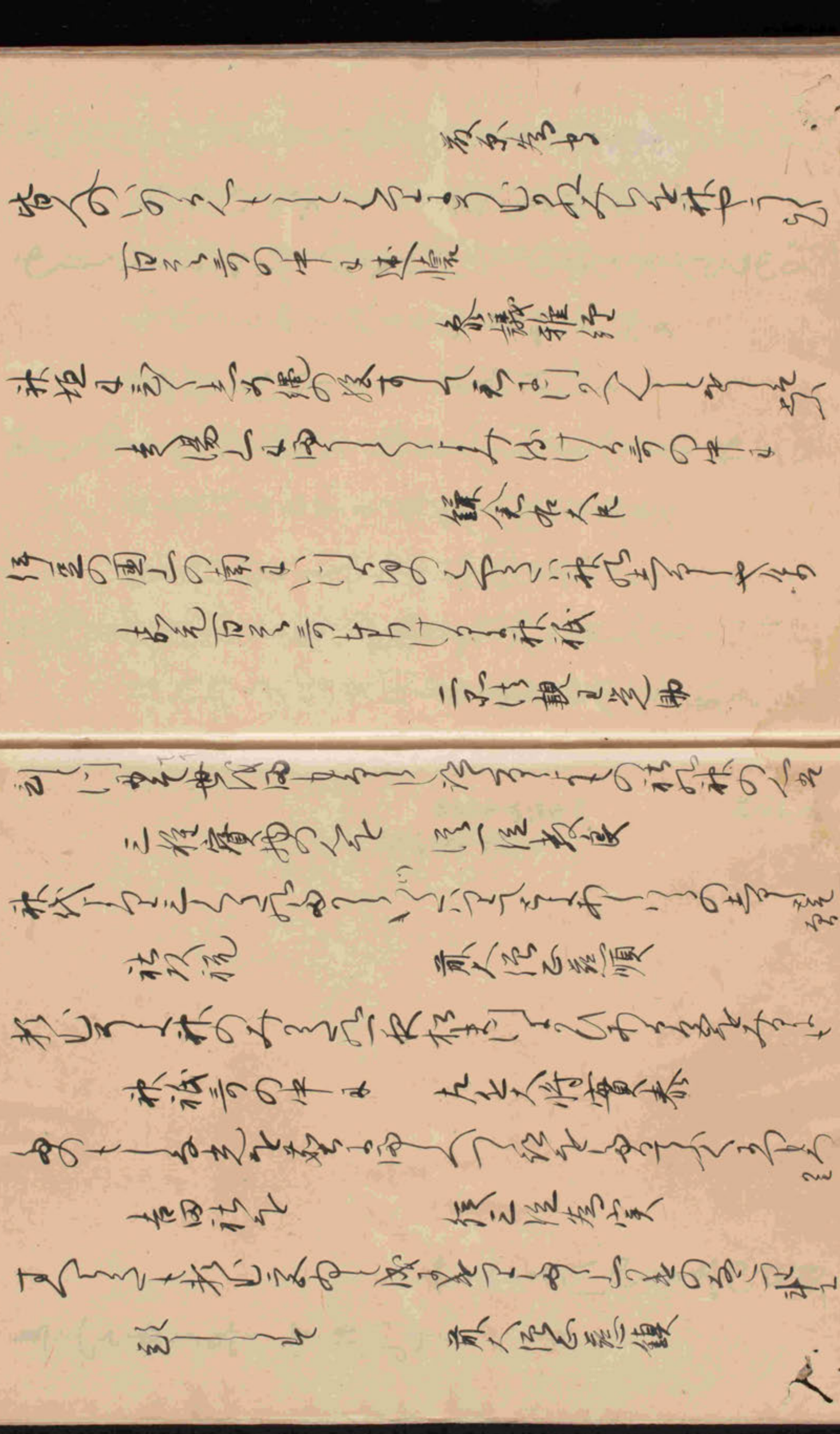
中京師光朝臣

ありをを社へ社へをみけをの侍ををちるの延

社袴の人を

摂人信都清春

もの代を社ををうみくを河のをを紫のをを



きつゝ世を思ふ夕秋風や　芭蕉

みとせ川の底の白波

四季の部一編り

安政丙午九月十八

[illegible]